LA REVUO ORIENTA



エスペラント語研究雜誌「ラ・レヴオ・オリエンタ」

MONATA ORGANO DE JAPANA ESPERANTO-INSTITUTO

JARO VIII
N-RO 9

第八年　第九號

AŬGUSTO
1927

目　次 (ENHAVO)

JAPANA ESPERANTO-INSTITUTO, TOKIO, Uŝigome, Ŝin'Ogaŭamaĉi III-14
東京市牛込區新小川町三ノ十四　財團法人 日本エスペラント學會
[Jara abono internacia 7 svisaj frankoj]

★ 編 輯 後 記 ★

★例年八月號は多少特別號にするので今度も例月とちがつてセリシエフ氏の手紙を七頁つゞけてのせてみました。文章もやさしいし分量も多いので對譯にしませんでしたが六ケ敷語にすべて註をつけましたから、辭典をひかなくても容易によめると思います。あまりしられてゐない滿州の印象記ですから皆樣にとつて興味の深い讀物だろうと考へます。大分セリシエフ氏一流の變な語法や用語がありますが其儘にしておきました。

★本誌七月號は第八年第七號で七月發行の臨時增刊は第八年第八號としましたから、八月號は第八年第九號になります。本年は增刊をだしましたから年鑑(會員名簿)を出す餘裕がありませんから出しません。あしからず。

★前月號で學會の實情も申上げましたので各地の諸君からいろいろ激勵や慰籍の御手紙をいたゞきました。厚く御禮申上ます。先に罵倒をあびせかけた方も當方の實情を御了解下さつたことと認めてあの手紙は發表を差ひかへます。

★九月號は9月上旬發行できると思ひます。福岡での大會の豫報は九月號及十月號へのせます。

財團法人　日本エスペラント學會編輯部

LA REVUO ORIENTA

★ JARO VIII, N-RO 9 ★ MONATA ORGANO DE J. E. I. ★ AŬGUSTO, 1927 ★

電氣工學術語と國際語

九大敎授　工學博士　荒　川　文　六

「學術に國境なし」といふ言葉はよく人の唱へる言葉で、學術の研究なるものは人種國籍等の差別を超越してゐるものだと云ふ事を意味するのは云ふ迄もない事で又夫れに間違はないと思ふのであるが然し實際に於て之が何處までも徹底的にさうであると云ふ事になると多少の疑がない譯に行かないと思ふ。かく思はれる事の一つは言葉の事である。學術の研究そのものには國境がなくても其の研究を發表する機關である言葉には今の處では差別があるので、全く總ての人類總ての國語が平等であると云ふ事はないと思ふ。

我國に於ても他方面の學術の事は姑く措いて唯電氣工學の方面の事のみを以て見ても電氣學雜誌や其の他の雜誌或は研究所等の報告書等に新しい研究の發表や報告が載せられる事は決して珍しい事ではないのであるが、之が唯日本語で綴られ日本字で書かれてあると云ふ點だけで之を讀み之を了解する者は殆ど日本人に限られてゐると云ふ樣な譯である。電氣學會では此の不都合を幾何か緩和する爲に其誌上に發表する論文には其の始めに英語で其梗概を記す事としてゐる。然し自分の國語以外の言葉では自分の持つてゐる思想を遺憾なく現はすと云ふ事は六ヶ敷と云はなければならない。又論文を英語に飜譯して發表したとしても其英語が比較的に世界の各處に普遍的に用ひられてゐると云はれてゐるけれども之の讀めない者之を了解しない者に取つては日本語で發表したのと五十步百步である。そして事實上英語を解さない者も決して尠くない。私は此の樣に論じたからと云つて論文等を英語に譯して發表する事が惡いといふのではない。唯發表の機關である言語に此の樣な差別がある以上は學術に國境がないと云ふ事を無條件で是認する事のできないと云ふ事を云ひたいのである。

言葉の點に於ては我國は決して國際的に餘り都合のよい立場に在るものではない。此の不便な立場から脫却する爲に或人は國際語エスペラントの使用を主張してゐるし又或る人はローマ字の使用によつて多少なりとも此の不便を免れる事が出來ると論じてゐる。私は其等の人の主張に共鳴出來る點が尠くない。唯之を實行するには如何したならば宜しいかと云ふ事に就ては少しく考ふべきものがあると思ふ。

Esperanto が現在の何れの國の言葉でもなく全く別個の國際語である以上之を自由に使用する樣になるには一の外國語を學ぶと同樣の努力をしなければならない。之は無論當然の事であるけれども國際語を一般に用ゐると云ふ事に就ての一つの困難であると思ふ。其處で私は一の考をのべて諸士の御敎示を願ひたいと思ふのはせめて電氣工學に關する術語だけでも之を國際語で表はす事は出來ないものであらうかと云ふ事である。

私は思ふに電氣に關する言葉の中にも自然二つの種類がある。其の一つは一般民衆が日常之を用ゐるもので電車とか電燈とかスヰッチとかコードとか云ふもので其數は餘り多くはあるまい。又其の二は所謂專門家と稱せられる人達に必要な言葉で一般民衆には比較的緣の遠い言葉である。此第一種に屬する術語に對しては適當な譯字を作つて置く必要があるであらう。然し第二種に屬する術語に對しては强ひて六ヶ敷い譯語を作る必要が果してあるのであらうか。若し譯字を作らないとするならば如何なる言葉を用ゐるのかと云ふに現在我國では一般に英語が用ひられて居るけれども私は凡て電氣工學に關する術語は第一種のものも第二種のものも專門家用としてはエスペラントの樣な國際語を用ゐて之を國際的に統一したいと思ふのである。此の樣に術語が國際的に統一せられると用語の差異に基く間違や誤解を除く事が出來ると云ふ利益があるばかりでなく又研究上の連絡の點から云つても便利であらう。此の樣になつて始めて學術が所謂「國境なし」と本當に云ふ事ができるのであると思ふ。

(電氣評論第15卷第1號所載の論說を記者が短くしたものです。そのため博士の本旨を十分お傳へできなかつた點は幾重にもお詫びします。)

國際聯盟と國際共通語

國際聯盟東京支局　粟 飯 原 　晋

— 1 —

世界五十五ヶ國の加盟せる國際聯盟は、現代に於ては勿論、之を過去の歴史に徴するも有史以來最も偉大なる國際的機關である。この國際聯盟では、英、佛兩國語を公用語とし、總ての文書は此の兩國語で發表し、國際會議にも總て此の兩國語が使用せられることを原則としてゐる。しかし英語はイギリスの國語であり、カナダ、南アフリカ、印度、オーストラリヤ等に於て使用せられてゐる言葉である。またフランス語はフランスの國語でありスイス、ベルギー等以外には餘り使用せられてゐない。たゞ英語は商業語としての國際的勢力頗る大なるものがあり、歐洲大戰後は米國の隆盛と共に益々有勢なる地位を占むるに至つた。之に對して、フランス語は昔ながらの社交上の言葉として相變らず勢力を有してゐるものである。國際聯盟が是等二ケ國の兩國語、或は單に數ケ國にしか一般使用せられてゐない兩國語を、その公用語に採用したのは、英佛兩語が世界各國に於て相當廣く了解せられてゐるからの窮策に過ぎなかつた。例へば、スペインを宗主とするスペイン語國民は聯盟五十五ケ國中十六ケ國に及んでゐるのであるが、スペイン語は英、佛語の如き一般的勢力のない國語である。

— 2 —

1920年秋國際聯盟第一回總會の頃、スペイン語を公用語とするの議論があつた當時、國際聯盟事務局情報部の藤澤親雄氏（現在は九州大學教授）は、「Esp. を聯盟に採用するの急務」を說き、これが「若し南米諸國がスペイン語を提案するならば、日本は必ずEsp. を持出すべし」といふ記事になつて、多くの新聞紙上を賑はしたのであつた。けれども、是は噂に止まつた。——しかし、此の結果は Esp. を教課目編入の建議案となつたが、時期尙早で否決せられ、第二回總會には可決、第三回總會には Esp. に關する報告書を可決した。

— 3 —

國際聯盟の事務執行機關なる事務局には、約500名の局員がなり、その國籍は40に上つてゐる。アルメニヤ人も、トルコ人も、印度人も、ハンガリヤ人も居る。その國語數は約 30 にも達するであらう。是等の人が每日机を列べて事務を執るのであるから、豈國際中立語の必要なからんや。然も此の要求が聲を大にして叫ばれないのが不思議である。

— 4 —

東京帝國大學教授神川彥松氏は、最近「國際聯盟政策論」を著した。その第四章文化價値の世界共同管理、第二節には「世界共通語の制定」と題して、

「世界萬國が唯一の共通語を用ふるに至る事は理想であるけれども、容易に實現を期する事が出來ぬ。先づ世界各國をして其母國語と相並んで共通語を使用せしむる事となさればならぬ。而して、今日各國に於て一若しくは數個の外國語を小中學校等に於て敎るが如く、世界語を學習せしむる事とすれば數代の間には共通語は世界各國に於て相當普及するに至るべく、國際交通及人類文明はこれより測るべからざる利益を受くる事となるであらう。」(P. 244) と云ひ、「殊に國際聯盟の如き國際連帶の關係を緊密ならしめ、人類同胞の情誼を濃厚ならしむる使命を有するものに在りては、世界語の採用を絕對的必要とする事は當然であらねばならぬ。」(P. 241) と說き、人造國際共通語の採用を推奬して居られる。

— 5 —

最後に神川教授が「世界共通語の使用の具體的方策として」提唱せられるものは、言語問題に依つて常に惱みつゝある國際聯盟に最も公正にして且つ賢明なる解決を與へるものであり、言語上常に不利な立場にある我が國にとつての一大福音である。

神川教授は曰く「先づ國際聯盟自體に於て國際聯盟に働く處の總ての吏員が、世界共通語を使用し、涵養する事とすべきである。而して國際聯盟に關する會議の用語、一切の文書は其世界語を使用する事にすべきである。」(P. 244) と。吾人は神川教授の理解ある所論に對して、滿腔の謝意を表するものである。

(La 2-an de Julio, 1927.)

海　外　報　道

エスペラント四十年祭記念切手

★エスペラント及びザメンホフの名譽★

最近の „Sennaciulo“ 紙によれば、これまで屢々エスペラントに好意を示した勞農政府の郵便廳は、今回エスペラントの四十年祭を期とし、その記念切手を發行することになつた。

同紙所載の同切手見本刷の寫眞を見るに、その切手は横長で左方にザメンホフ博士の肖像を入れ、右方には綠色あざやかな大工場の影畫の中に白く „Esperanto“ の文字を打抜き、大巻揚機が „XL“（=40）なる數字を引揚げてゐる所をあらはしてゐる。後ろには大きな綠の星と 1887, 1927 の數字がある。尚上部には例の如く USSR（Unuigita Soveta Socialista Respubliko の略字）及び CCCP（上記のロシヤ語ソユス・ソヴエトスキヒ・ソツィアリストィチエスキヒ・レスプブリクの頭字）、下部には „Poŝto“ そのロシヤ語ポチタ及び額面金高が書いてある。（寫眞には 14 コペツク〔これは外國行書狀の料金である〕のが出てゐる。）

思ふに舊ロシヤ皇帝の肖像が、ロシヤの切手よりのぞかれて以來、その肖像を切手に入れることによつて名譽づけられた人々は、僅かにレニン（これは當然）、レモノソフ（有名な科學者）、ポポフ（ラヂオの發明者、無電の實際的實驗の最初の成功者。この切手が Esperanto 入りで出たのは讀者の記憶にまだ新しい所）及び我がザメンホフの四人にすぎない。エスペラントが現今のラヂオの如く、全世界に擴まる時を考へれば當然であるが、かゝる名譽が與へられようとは我々自身すら意外とする所である。我々の目的も亦意外に早く達せらるるのではあるまいか。

ダンツィヒ大會前記

★第十九回萬國エスペラント大會★

エスペラントの四十年祭を兼ねてダンツイヒで開かれる今年の萬國エスペラント大會では同自由市當局の好意により、色々の新しい記念の催しや計畫が出來た。前號所載のエスペラント文説明附き官製記念繪葉書（官製葉書の如く切手も刷りこんであるもの）の發行もその一つであるが、そのほか數々の Novaĵo が sensacio（Ne legu : sensenco）をひきおこした。

★大會の數ヶ月前よりヂユネーヴにある中央エスペラント委員會の書記アンドレオ・チエ氏がダンツイヒ自由市に出張し準備に、宣傳に、講習に（申込殺到した故、三組に分ち、午後と夜にやつたと云ふ大成功、大會參加者の便をはかるため、電車の車掌等當局の命により公けに派遣されたものも少なくなかつた。）休む間もなく働いた。

★大會は7月28日より8月4日までダンツイヒ自由市上院議長ハインリヒ・ザーム氏を名譽會頭にいたゞいて行はれた筈であるが、恒例の大會プログラーモのほかに毛色の變つたものがある。卽ち、自由市にある有名な温泉場ツオポツト市では今度落成した新大通りを「エスペラント通り」、その大通りの終りにある廣場を「エスペラント廣場」と命名することになつたが、その命名式が今度の大會中に花々しく行はれる。

★尙上記「エスペラント廣場」の中央には「記念の檞」（抄錄者註に曰：「檞」と云つても「あちら」のは日本のとは少し種類がちがふものださうだが、大へん神聖な樹とされてゐる。日本のように注連繩は張らないが、田舍などではよく神木として檞が祭つてある由。）を植ゑることになつた。それには大會參加者各自がおのおのその鄕土の土を 1 kg. づつ持つて來て根にうめるのださうである。この式には高貴の身を以てはじめて一參加者として大會に參加せられるスエーデンのカール殿下もストクホルムの宮殿の御庭の土を以て加はられると云ふことである。この檞植ゑの式に參加した者の名は Ora Libro に記載され永く保存され、又その式は活動寫眞にとられる由。（1 kg. づつの土では不足しないかとか、肥料もやらないと枯ますぜなどと冷かしてゐる奴がある。御心配御無用、そんなこまかい事まで新聞は書きません。Sennaciulo へ）

★又、ダンツイヒ駐在、國際聯盟特別委員ファン・ハンメル博士、ポーランド國公使、ストラスブルガー博士等の大會參加者招待會があり、その他各方面よりエスペラント及びエスペランチストは honori されてゐる。

★大會中にはダンツイヒ第一の大新聞たるダンツイガー・ノイエステ・ナハリヒテン紙は特にドイツ語とエスペラントの二語で編輯さ

れることになつた。そのエスペラント欄には、政治、經濟、社會、科學、運動等日常新聞記事一切のほかに、大會の報告がくわしく載せられる。かゝる大新聞がかく二語制をとつたのは之を以て嚆矢とすべく、將來各新聞が外國語で記事をいれる時には絶對中立のエスペラントでするであらう事がしのばれてよろこばしい。

★大會中にはダンツイヒ放送局よりたえずエスペラントの放送があるが、殊に 30 日にはダンツイヒ及びケーニヒスベルヒ放送局より(後者は前者の中繼ならん)各國人がその國語及びエスペラントで二分間演說をする。

★大會が終つてからは一同そろつてワルシヤーワのザメンホフの墓にまいり(ポーランド當局の好意により旅券の査證が無代となつた由) Postkongreso をする。

★又ポーランドのビエリストク市ザメンホフ通りにあるザメンホフが生れた家にはこのたび市より memortabulo がおかれることになつたが、その式にも上記ワルシヤーワの Post kongreso 後に出席出來る。

★例年萬國エスペラント大會と共にある國際夏期大學には今回始めて日本の淺田一博士が「日本に於ける法醫學に就て」を講義される。

★日本より大會に出席する人々は鐵道省技師小坂狷二氏、長崎醫大敎授淺田一博士夫妻、京城大學敎授長谷川理衞氏、東京朝日記者土岐善麿氏、畫家小寺廉吉氏、高層氣象臺長大石和三郞氏、四高敎授瀨川重禮氏等である。

★大會のくわしい報道はなるべく來月號にのせたいと思つてゐるが、郵便の都合で斷言出來ぬ。

第一回國際狂犬病豫防會議

最近パリーで開かれた同會議には 33 ケ國の代表が集まつたさうであるが、國際會議につきものの用語問題が起つた。ポーランドのビユイウイツト博士等の同志がエスペラント採用について努力したが、殘念ながら不成功であつた。が我國代表の城井尙義博士等はエスペラントで演說して大いに氣焰をあげ、一同に多大の興味を與へた。

AIZ とエスペラント

AIZ (Arbeiter Illustrierte Zeitung=Ilustrata Laborista Gazeto) は全世界に 27 萬の讀者を有するプロ派最大の週刊誌であるが、今度挿畫などの說明には、一部ドイツ語のほかにエスペラントを用ふることになつた。追つては全誌を獨・エス平行に書かうと云ふことである。

國際エスペラント學會

同會ではエドモン・プリヴア博士その他を講師として 8月 29日より9月4日までジユネーヴにてエスペランチストのために、エスペラントの文法、文章法、語彙、誘導法、發音、由來、歷史、文學、敎授法などを講義することになつた。エスペラント講習に於て、講師の良否はその成績に非常に關係するものであるから、日本でも早晩かゝる方法を講じてイカモノならぬシツカリした講師を得られる樣つとめたいものである。

SAT の大會

Sennacieca Asocio Tutmonda の大會は前記の大會とは別に、フランスのリヨン市で8月12日より5日間開かれる。

各國のエスペラント大會

歐洲各國の大會は多く Pentekosto 中に行はれるのを例とするが、最近行はれた國々をあげれば

ベルギー、フランス、オーストリア、オランダ、スエーデン、ルーマニア、北アメリカ、カタルナ州(イスパニア)

等である。

國際花遊び大會

ギリシヤの古典に則り毎月カタルナ、エスペラント聯盟主催で行はれる同會は、全世界のエスペラント文藝家の興味をそゝつてゐるが、今年は地中海バレアル郡島のソレルにて6月5日——7日に、前記カタルナ大會と共に開かれた。一等賞 Natura Floro はブダペストのチユヴイ・ロヴオスタン氏が Renkontiĝo と云ふ詩で獲得した。

以上 „Heroldo de Esperanto,“ „Sennaciulo,“ „Esperanto de UEA,“ „Informa Bulteno de la Int. Centra Kom. de la Esp. Mov.“ 等による。 (抄錄者：宍戸圭一)

萬國大會へ日本政府代表派遣

ダンチツヒ大會に對し日本政府は代表者を出席せしめる事に決定し大會二三日前外務省より大會出席の同志へ宛依賴電報を出せし由。

內　地　報　道

★大會いよいよ近づく★

來る10月15—17日に福岡市で開催される第十五回日本エス大會は準備も十分とゝのつたそうですから九月號に詳しい事を報道致します。ラムステツド博士、ベナヴルス氏、ロスコー氏等も出席される由。

猶本年も昨年からの吉例により鐵道省で參加者の汽車賃を二割引にしてくれるそうです。これも詳しい事は後刻申上げますが、この參加證によつて二割引の特典を利用する人が少いとあとから不足人數（百人未滿の時）だけの追徵金をとられることになりますから、二割引の特典のある學生、敎師等の諸君もぜひこの參加證の方を御利用下さい。參加證はいづれ近々印刷して御申出の向に對してお送り致します。

東京　7月8日夜濠洲ブリスベン市の元U. E. A. の delegito たる Percy Procter 氏が學會へ突然訪れてこられたので、神田橋ホテルを紹介し、夜十時半三石、德田、岡本の三人で訪問していろいろ宿との交涉等をしてやつた。其後屢々學會の例會にも出席し目下滯京中。同氏は teozofia asocio の sekretario で 67 歲の高齡であるがとても痛快な人で足許のあぶなつかしいのに拘らず單身日本訪問にきたので先づ神戶へ上陸し、神戶エス協會の同志にあひ又大阪でも同志と屢々遭つたとの事で當地では德田六郞氏が方々の案內その他種々御世話して下さつてゐる。F-ino Casy も teozofiisto なので一緖に鎌倉へいつたり、8月5日には富士登山もした。（富士山の絕頂へ Verda Standardo をたてるといつて大元氣ででかけたが九合目でとうとう困まつたそうで、多分 Casy 孃が代りに頂上までもつていつたことゝ思ふ。）★7月30日晚丸之內鐵道クラブで東京エス倶樂部主催で上記 Procter 氏と京城から所用で上京された大山時雄氏とに對する歡迎會を開いた。急にきまつたので十分の準備がなかつたが有志と別室晚餐を共にし、19時から茶話會にうつり、Procter 氏がたつて各地で同志に歡迎されたことを愛嬌たつぷりと話し、次いで大山氏たつて挨拶された(共にエス語)。その後でくつろいで Procter の teozofio の話しや、大山氏の朝鮮でのエス運動の話等あつて興趣つくるをしらぬ中に定刻になつて散會した。★8月3日豫て數學敎師の大會に參加のため上京された朝鮮エス協會の 白南奎(Paik-Nam-Kiu) 氏が學會を訪問された。同協會の宣傳方面を一手にひきうけてやつてをられるだけあつてとても熱烈な同志である。★內務省社會局では安武庶務課長、吉阪監督課長の盡力により7月25—30日迄エスペラント講習會を開いた。その第一日には芬蘭公使ラムステツド博士の「芬蘭に於ける社會施設」と題するエス語講演があつた。講習者は四十三名。殆ど全部終りまで引續き出席した。指導者粟飯原晋氏。

北九州　7月24日 北九州の同志は小倉市の沖海上8哩の地はある藍之島に船遊びを催しました。同島には山口縣の同志東原兵吉氏が漁業の爲滯在されてゐるので同氏を訪問し、その好意により大敷網と稱する網曳を見るため、我々は三隻の漁船に分乘し壯快な網曳をし、尺餘の魚が百餘りもとれ獲物は全部我々に下さつた。實に愉快な一日であつた。參加者は門司、小倉、八幡、戶畑の四市より14名。　（中西氏報）



德田氏、ブロクター氏　ケーシイ孃　　白南奎氏

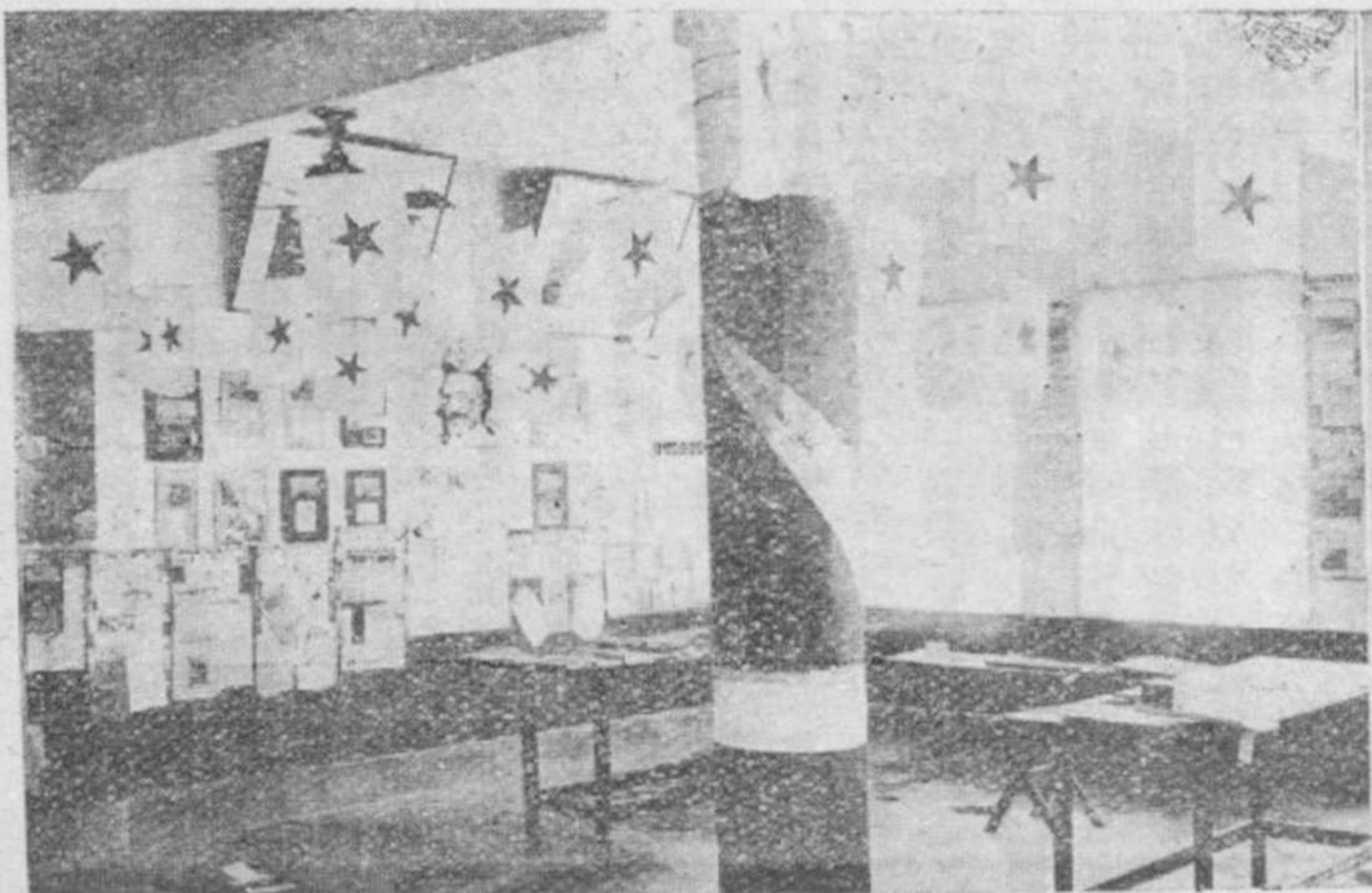
綠星たより

【寫眞說明】——〔上圖右〕ハルビンの同志と淺田博士夫妻。前列左より Cvetkova、淺田夫人、L. Penskaja、Ĉ. Sun の諸孃。後列左より P. Pavlov、N. Radajev、淺田博士 A. Frolov, Cin-Di-Cin, Ĉarušnikov の諸氏。〔上圖左〕高層氣象臺（遠足したエスクラピーダ會の人々。左より前列關口、大石夫人、小木曾、中村、和田の諸孃、浦。後列。鈴木、西博士、黑澤、大石臺長、白岩、山田、松岡、進士、山本、田邊の諸氏（前號記事本號エス文參照）。〔下圖右〕横濱商業學校エス會。前列左より、田中、村兩教諭、唯野教頭、美澤前校長夫人、椎橋好氏（前號記事參照）。〔下圖左〕松江市でのエス語展覽會場の光景（前號201頁記事參照）。










新聞雜誌とエス語

★德島毎日新聞(7月30日—8月1日)——エスペラント詩人ユリオ•バギイに就て——粟飯原晋氏。

★國民新聞(8月3日)——エス萬國大會に關する報道——(記事)。

★京城日報(7月31日)——同上。

★福岡日々新聞(8月3日)——同上。

★ジヤパンタイムス(8月4日)——同上。

★東京朝日新聞——ラザオと國際語——富士太郎氏(投書欄)。

★信濃毎日新聞(7月24日—28日)——ヒトリノエスペランチストノオモヒデ——(Bulgarujo のA. D. Atanasov 氏の Rememoroj de Esperantisto から抜萃したものをカナガキで連載せしもの)。

★東京日々新聞——法典飜譯にはエス語(投書)。

★科學新潮(8月創刊)——國際語時代——西成甫博士。

★小坂氏等より★

★七月九日　ロンドン發信

Morgaŭ mi veturos al Parizo kaj tuj poste al Berlino.

★七月十六日　ケルン市發信(Heroldo de Esperanto 社を訪問して)

Ni sendas nian koran saluton okaze de nia vizito al S-ro Teo Jung, ĉe la redaktejo de Heroldo.

(署名者：小坂氏の外長谷川氏、Teo Jung 氏、Heini Jung(?)氏)

★七月二十七日　ベルリン市發信

Hodiaŭ ni kunvenis ĉe la hejmo de S-ro Glück kaj havas tre bonan tempon.

(署名者：土岐善麿、小坂狷二、長谷川理衞)

Al salutoj de viaj ĉarmaj samnacianoj mi aldonas mian sindonan saluton.

J. Glück.

★七月二十七日　獨逸 Swinemünde 市より

La Antaŭkongreso en Berlin finiĝis kaj ni nun kuras en vagonaro al Swinemünde per karavano organizita de granda firmao Rudolf Mosse.

La dua karavano organizita de Berlin Esperant. Asocio nin sekvas. Ĉe Swinmünde ni kuniĝas kun ili kaj veturos sur la sama ŝipo kaj alvenos Danzig morgaŭ matene.

Hieraŭ la antaŭkongresanoj vizitis grandegan flughavenon de Luft Hansa en Templ Berlin kaj ni flugis en aeroplanoj super la urbo Berlin. Feliĉe neniu el la aeroplanoj falis. Ni estas tre gajaj, ĉar morgaŭ ni renkontos aliajn samideanojn el Japanujo.

Tute Via K. Ossaka.

Veturas kun mi S-roj Z. Toki
kaj R. Hasegaŭa.

★ 一萬年保存されるエス文 ★

〔高野山の震災記念塔の下に震災橫死者名簿と共に埋められて〕

前東京市長永田秀次郎氏が、大正十二年の關東大震災で死亡した人々の名を全部書きあつめて、それにこの企の由來を書きしるした文をそへて、一萬年保存される樣にしたものを高野山へ殘す事にした事は、世人衆知の事であるが、この一萬年保存の文章は、日本文の外に英文とエスペラント文とを入れることに定め、永田氏よりそのエス譯を我が日本エスペラント學會へ依頼されたので、井上萬壽藏君がエス譯してお渡しした。いづれ淨書の上一萬年保存される事だろう。その譯文はいづれ本誌上で紹介します。

點字新聞だより——〔中西義雄氏報〕

★日刊東洋點字新聞　第771號(昭和2年8月8日)の記事によれば大阪盲人エスペランチスト有志主催で大阪市立盲學校に5日午後1時よりエスペラント大會を開き、6日より10日間講習會を開催した。大會決議事項は 1. 日本盲人エスペラント協會確立の件。2. 萬國エスペラント協會に加盟するの件。3. 全國盲學校にエスペラントを採用せしむるやう文部省に建議するの件。

★點字大阪毎日新聞　第274號(昭和2年8月11日)の記事によれば去る5日午後大盲(大阪盲學校)で盲人エスペランチスト大會開かれ、米田ドクトルのエスペラントに就ての特別講演などがあり、餘興として音樂の演奏があつた。

エスペラント初等讀み物

第一　年　月　日

Unu jaro havas dek du monatojn aŭ kvindek du semajnojn aŭ tricent sesdek kvin tagojn. Unu tagon oni dividas en dudek kvar horojn, unu horon en sesdek minutojn, unu minuton en sesdek sekundojn. Ĉiu sezono havas tri monatojn.

Kiuj estas la nomoj de la monatoj? Ili estas januaro, februaro, marto, aprilo, majo, junio, julio, aŭgusto, septembro, oktobro, novembro, kaj decembro.

Kiom da tagoj havas unu semajno? Unu semajno havas sep tagojn: d'manĉo, lundo, mardo, merkredo, ĵaŭdo, vendredo, sabato.

Kiujn sezonojn havas unu jaro? Unu jaro havas kvar sezonojn: printempo, somero, aŭtuno, vintro.

Kiuj monatoj havas tridek tagojn? Kiu monato havas nur dudek ok aŭ en superjaro dudek naŭ tagojn?

La daton de ĉiu tago ni vidas en la kalendaro. Kiun daton ni havas hodiaŭ? Hodiaŭ estas la unua (tago) de aŭgusto, hieraŭ estis la tridekunua tago de julio kaj morgaŭ estos la dua de aŭgusto. La aŭtoro de Esperanto, D-ro Zamenhof, naskiĝis la dekkvinan de decembro en la jaro mil-okcento-kvindek-naŭa.

Kion vi faras la tutan tagon? Matene je la sesa mi vekiĝas. Mi matenmanĝas je duono post la sesa. Poste mi laboras ĝis la tagmezo. Je la tagmezo mi tagmanĝas. Post tio mi ripozas unu horon. Posttagmeze mi ankaŭ laboras. Vespere je la deknaŭa mi vespermanĝas. Poste mi legas librojn. Mi enlitiĝas je la dudekdua kaj nokte mi dormegas, ĉar mi es as laca.

初等エス譯

井上萬壽藏

日本語で「いゝ」といふ語はエスペラントの bona に相當するが、日本語は複雜で色々な言ひ廻しがあるから、bona 一天張ではいけない。その時と場合の意味を汲んで、その意味がなるべく精確に表はれる樣な語を選んで譯さなければならない。下に例を擧げて說明する。

(一) 雨が十日も**降ればいゝ**。

「いゝ」は estas bone であるが、上の文の樣な場合には一寸當てはまらない。「ればいゝ」といふことは「ることを望む」といふことだから下の如く譯す。

(1) *Mi esperas, ke* pluvu ĉirkaŭ dek tagojn.

ĉirkaŭ は「十日も」の「も」を利かしたのである。「十日も」といふのは「十日ばかり」といふ意味だから。

(二) 歩く**方がいゝ**。

「電車に乘るか歩くか?」といふ質問に對する答としてかう云ふとする。この場合の「いゝ」も estas bone はまづい。自分は徒歩の方を結構だとして採用する意味だから下の如く云ふ。

(2) *Mi preferas* piediri.

pied-iri 足で行く、徒歩する。

(三) **よかつたら**どうぞもう一杯。

これも se estas bone ではおかしい。「よかつたら」とは「お氣に召したら」といふ意味だから、

(3) Unu tason plu, *se al vi plaĉas.*

「どうぞ」といふ意味をもつと利かせようと思つたら、文の初めに Bonvolu 又は Volu を付ければよい。

(四) **どちらでもいゝ**。

「蓄音機を聞かさうか、ラヂオを聞かさうか」或は「珈琲を上げようか、お茶を上げようか」といふ樣な問に對するもの。もしこの場合に例へば「お茶がよい」といふのなら前揭 (2) によつて Mi preferas teon. といへばよいが「どちらでもよい」といふのならばこれはどちらでも自分に取つては同じであるといふ意味だから、

(4) *Estas tute egale* por mi.

(五) 出發の用意はもう**いゝか**。

この「いゝか」は「覺悟はいゝか」の「いゝか」と同じである。

(5) Ĉu vi estas *jam preta foriri?*

(六) それ**でいゝ**。

これは人に手傳を賴んだ樣な場合に云ふ言葉で、それで充分だといふ意味。

(6) *Tio estas sufiĉe.*

(七) いえ、**よろしう御座います**。

「お送り致しませう」「いえ、よろしう御座います」等の場合。

(7) *Ne, dankon,* sinjor(in)o!

(八) 君はそれで**いゝ**積りか。

この意味は君はそんな風で自分自身を正當だと思つてゐるのかといふことであるから

(8) Ĉu vi pensas vin *prava?*

Prava の代りに deca でもよい。「それで」は強いて譯さなくともよい。

(九) 早く出掛けるが**いゝ**。

これは強い意味にとれば「出掛けるべし」といふ命令とも見られる。その場合には devas を用ゐるが適當、それ程強くない意味ならば前例の dece を動詞にして decas として用ふるがよい。

(9) Vi *decas* (*devas*) tuj ekiri.

「出掛ける」を foriri (立ち去る) と譯してもよい。

(十) はいつ**てもいゝか**。

これは「はいることを許してくれるか」簡單に云へば「はいることが出來るか」といふこと。

(10) Ĉu mi *povas* eniri?
Ĉu vi *permesas min* eniri?

(十一) 僕は喰べなく**てもいゝ**。

同じ「てもいゝ」でも、この場合には喰べる必要がないといふ意味だから、

(11) Mi *ne bezonas* manĝi.

(十二) **いゝ**助手をお持ちですね。

この「いゝ」は bona でも差支はないが「有能な」といふ意味だから、

(12) Vi havas ja *taŭgan* asistanton.

ja を入れたのは「ですね」の「ね」の意味を獨り合點の心持にとつて表したのである。多少疑の氣持があつて察して云ふときには ja の代りに文の最後に ĉu ne を付けて「Vi havas taŭgan asistanton, ĉu ne? と云つてもよい。asistanton は勿論 helpanton でもいゝ。

人生

【LA VIVO】

Mi renkontis knabinon; ŝiaj nigraj haroj brilis kiel lako japana, kaj ŝiaj miozotbluaj okuloj demandis:

"Ĉu vi venas kun mi?"

"Mi ne povas", mi flustris, "pardonu, mi ne povas. En la montoj estas printempo, kaj mi devas admiri la florantan naturon. Mia animo kantos la plej belajn kantojn, vidante la fumantajn valojn kaj la leviĝantan sunon. Mia animo estas gracila kaj kantante deziras la solecon. Pardonu, mi ne povas!"

La tempo pasis...... Kaj denove mi renkontis belan knabinon; ŝiaj brunaj haroj posedis la koloron de kaŝtanoj: la okuloj, kiuj promesis grandegan amon, logis:

"Venu, venu kun mi!"

"Pardonu", mi ĝemis, "mi ne povas. Mi havas hejme multegajn, dikajn librojn kaj mi ankoraŭ ne scias, kio estas en ili. Oni diras, ke oni povas trovi en ili multe da saĝeco kaj beleco. Tre volonte mi volus akompani vin tra la tuta vivo, tre volonte; sed mi devas legi hejme la dikajn librojn..."

La tempo pasis...... Mia animo ne kantis plu melodiojn al printempo, ĝi fariĝis muta...... Hejme mi ne havis plu dikajn librojn legotajn, mi jam delonge finlegis ilin. En mia animo regis soleco, hejme kriis en ĉiuj anguloj la malpleno; mia vivo estis malĝoja, malgaja kaj soleca.

Ankaŭ nun mi renkontis belan knabinon: ŝia kapo estis pli kliniĝema ol la kolo de l' cigno, la okuloj estis nigraj simile al la malhelega nokto kaj la haroj memorigis pri la plumaro de l' korvoj.

"Venu kun mi!" mi petis. "Plibeligu mian vivon!"

"Pardonu, mi ne kuniros," ŝi respondis, "vi jam estas maljuna."

私は少女に逢つた。彼女の黒髮は日本の漆の如く輝いて居り勿忘草の如く碧い(miozot'-blua)眼は「私と一緒にいらつしやらない」と尋ねて居た。

「私は出來ない」と自分はさゝやいた。「濟まないが私は一緒に行けない。山には春が來て、私は咲き匂つて居る自然を讃美しなければならない。私の魂は煙つて居る谷間や昇る太陽を見ながら最も美しい歌を歌ふであらう。私の魂はのびのびとして歌ひながら獨りつ切りになりたいと願つて居る。すまないが私は一緒に行くことは出來ない。」

時は過ぎさつた……そして再び私は美しい少女に出逢つた。彼女の褐色の髮は栗色をして居た。廣い愛を思はせる眼は「いらつしやい、私と一緒にいらつしやい」と誘惑した。

私は溜息をついた。「すまないが、私は出來ない。私は家に澤山の厚い本を持つて居て、その中に何があるか私はまだ知らないのだ。人の話によればその中には多くの智と美が潜んで居るのだ相だ。どんなに喜んで私は一生を貴方と一緒に行きたいと思つて居る事だらう、どんなに喜んで……。けれども私は家で厚い本を讀まなければならない。」

時は過ぎて行つた……私の魂はもはや春にむかつてもメロデーを奏でなくなつた、私の魂はものを云はぬやうになつた……家にはもう讀むべき厚い本はなくなつてしまつた、私はずつと前にみんな讀み了つてしまつたのだ。私の魂には淋しさがみち、家のどの隅にも空虛が叫んで居た。私の生活は悲しく陰氣で孤獨であつた。

その時にも亦私は美しい少女に出逢つた。彼女の頭は白鳥の首よりも一層たをやかに、眼は闇の夜の如く黑く、髮は烏の羽を想はせる如くであつた。

「私と一緒にいらつしやい」と私は賴んだ、「私の生活を一層美しくするために」。

「すみませんが私は一緒に參りません」と彼女は答へた「貴方はもう年をとつてしまいました」。

笑　話　數　篇

★ ERARE ŜTELIS ★

〔盜 み 違 ひ〕

Juĝisto: "Vi ŝtelis kuleron el la kafejo? Ĉu vi volas diri ion pri tio?"



Juĝato: "Jes, mi erare ŝtelis ĝin."

Juĝisto: "He! Erare? Kion tio signifas?"

Juĝato: "Ĉar mi erare pensis ke ĝi estas arĝenta kulero......."

【譯】 裁判官『被告はカフエから匙を盜んだな。夫について何か云ふ事があるか。』

被告『ハイ。私はそれを間違へてとりましたので。』

裁判官『ナニ間違へた？ それは何ういふわけだ。』

被告『ハイ、私はそれを銀の匙だと思ひ違へて居りましたので…。』

★ GRANDA DEVO ★

〔大 き な 務 め〕

Post la edziĝa soleno la pastro al la nova edzino: "Vi devas sekvi la vojon ĝis la morto, kiun via edzo antaŭenpaŝas.

Konfuzite la edzino: "He! Ĉu vi ne bonvolus ŝanĝi mian devon tiel grandan? Mia edzo estas poŝtportisto.



【譯】 結婚式終つて牧師花嫁に『あなたはあなたの夫の進む道を死ぬ迄ついてゆかればいけません。』

困却した花嫁『まあ！何とか其んな大きな務めは變へていたゞけませんかしら。だつて私の夫は郵便配達夫ですもの。』

★ ĈE BALO ★

〔舞 踏 會〕

Unu gasto sen kunulo promenadis en la balsalono kaj fine al iu, kiu oscedegis ĉe angulo:



"Kia enuiga balo!"

"Jes, terure enuiga!"

Ĉu vi ne volas eliri kun mi?"

"Volonte, sinjoro, mi volas akompani vin. Sed bedaŭrinde mi ne povas."

"Kial?"

"Ĉar mi estas la mastro."

【譯】 一人の客連がなく舞踏會場を歩きまはつた揚句隅で大あくびをしてゐる一人にむかひ『何んて退屈なんでせう。』

『全く酷いですよ。』

『御一緒に外へでませんか。』

『結構です、是非お供願ひたいですが殘念ながら出來ません。』

『どうしてです。』

『私はこゝの主人ですから。』

科學のエス語

Anatomio【解剖學】

浦 良 治

Sendube la malkovro de l' sangcirkulado faris novan epokon en la medicina rondo.

Depost multaj antaŭlaboroj pri preciza opinio de la sangcirkulado, kiujn faris multe da italaj anatomoj, William Harvey, anglo, kiu tiam loĝis en Italujo, donis la unuan fojon tre science precizan bazon por tiu ĉi teorio.

Ĉiu eltrovanto de nova vero estas ĉiam persekutata de siaj samtempuloj. Harvey ankaŭ estis mokata de tiamuloj, kiuj moke lin nomis "*cirkulatoro*", kaj lia kuracista reputacio malaltiĝis pli kaj pli.

Tiam aperis pli ol 25 kontraŭuloj al lia teorio, inter kiuj sin trovis ankaŭ fama tamen fiera John Riolan, profesoro de anatomio ĉe Parizo.

Rilate al tiu teorio, oni povas trovi kun miro en la libro "Grandaj Artistoj kaj Grandaj Anatomiistoj" de R. Knox tre historie interesan noton pri pentraĵo de Leonard da Vinci.

Inter liaj pentraĵoj troviĝas bildaĵo de diversaj pozicioj de duonlunaj valvoj de koro, (kies nodetoj de Aranti ankaŭ estas tre ĝuste montritaj) kiu devas esti projektita per ĝustaj vidpunktoj pri la sangcirkulado.

Ĉar L. d. Vinci jam vivis longe antaŭ Harvey, Knox konkludis ke tiu bildaĵo havas iom gravan valoron por decidi la unuan eltrovinton de l' sangcirkulado.

[El lernolibro de Anatomio de J. Hyrtl. 1873]

疑もなく血液循環の發見は醫學界に新時代を劃しました。

伊太利の多くの解剖學者がなした血液循環の正確な意見に就いての準備的研究の後當時伊太利におつた英國人ウイリアム•ハーヴエイが初めてこの理論に對する科學的に精密な基礎を與へました。

すべての新しい眞理の發見者は常に其時代の人たちから迫害されるものです。ハーヴエイも亦當時の人々から嘲けられました。人々は彼を cirkulatoro と綽名をつけ彼の醫師としての評判はだんだん下りました。

當時彼の學說に反對者が二十五人以上もあらはれました。その中にはパリーの解剖學敎授であり有名であつたが高慢だつたジョン•リオランもおりました。

この理論に關して吾人は不思議にもクノックスの「大藝術家と大解剖學者」といふ本の中でレオナルド•ダ•ヴインチの畫についての歷史的に興味ある斷片を見出す事が出來ます。

彼の畫の中に心臟の半月辨の種々の位置を畫いた畫があります(そのアランチ氏結節さへ正しく畫かれてゐます)。それは血液循環に關する正當な見地からのみ畫かれ得ると思はれるのです。

ダ•ヴインチはハーヴエイよりも遠く以前に生存してゐたといふ所からクノックスはこの畫は血液循環の最初の發見者をきめる事に對して多少大きな價値をもつてゐると結論しました。

手紙のエス語

[Kondolencoj]

【弔慰文】

Sinjorino!

En via granda malfeliĉo kian konsolon mi povus doni al vi? ....

Longe mi ŝanceliĝis interrompi per miaj vortoj viajn malĝojajn pensojn, malgraŭ miaj plej sincera amikeco kaj profunda ĉagreno, kiun kaŭzis al mi via perdo.

Tamen, se io povas konsoli vian malĝojon, certe tion povas fari la konvinko, ke ĝin partoprenas kun vi ĉiuj, kiuj konis, amis kaj estimis vian mortintan edzon.

Ho ve! mia kara amikino, li tro frue forlasis nin, sed ĉu ni ĉiuj ne devos sekvi lin pli aŭ malpli baldaŭ? ....

Kuraĝon! kaj zorgu pri via sano, tiel kara por viaj infanoj ....

Vivu, vivu por ili, sinjorino, kaj estu certa pri plej sincera simpatio de viaj amikoj.

Akceptu koran manpremon de via ....

[*respondo*]

Sinjoro!

Koran dankon pro la konsolaj vortoj, kiujn vi sendis al mi!

En mia malĝojo ili estas tion pli agrablaj por mi, ke jam de longe mi povis konstati la sincerecon de via amikeco por mi.

Neniam, sinjoro, mi forgesos, ke en la plej kruelaj por mi cirkonstancoj vi restis mia vera kaj sincera amiko.

Ankoraŭ unu fojon koran dankon de via sindonema ....

(el "Unua Legolibro" de D-ro Kabe.)

....

(この度の)御不幸に對しまして何とお慰め申し上げてよいか(如何なる慰藉をなす事ができませうか)……(迷ふ次第でございます)……。

私の最も眞摯な友情からも又此度の御不幸に對する深い悲しみの情から何とか申上ぐべきでございましたが何分貴女の御悲しみの御心持を私のまづい言葉で邪魔するにすぎない事と思ひしばらく躊躇致しました。

併しもし貴女の悲しみを御なぐさめできるものがありますものならばまさしくそれは亡くなられたあなたの夫を知り愛し且畏敬してゐたすべての人々が貴女とこの悲しみを共にしてゐるといふ確信から(貴女を慰める事が)できることでありませう。

悲しくもあなたの夫君は餘りに早くこの世をさられました。併しながらお互に我々はいつかは誰しも亡き夫君の後を追つて行くものではありますまいか……。

元氣をおだし下さい!お子供樣達にとつて實に尊い貴女として十分御健康に御留意下さい。

どうぞ長く御子供衆のために生きながらへて下さい貴女の友人達が常に深く同情をおよせ致してをります。(ことを御確信下さい)。

どうか眞心からの握手をおうけ下さい。

....

[同返事]

....

態々お慰めの御言葉をいたゞきましてありがたう存じます。

この悲しみの中にいたゞきました御言葉は私にとつて大變うれしくますます深く御許様の厚い御友誼の程を深く感銘仕りました。

この無情な運命にしひたげられてゐる私に對して眞面目な友としてまことの御悔みを下さいましたことを決して忘却は仕りません。

更めて再び心からの感謝を申上ます……。

....

(カアベ氏の讀本の原文を相當意譯しました。どうしてもこういつたものは各言語に多少獨自の色彩のあるものですから。)

臙　脂　の　女

【泰西エス文藝の渉獵】　山　中　太　郎

Frederiko Karinthy, 筆者は不敏にして"Biblioteko Tutmonda"叢書中に加へられた彼の短編集"Norda Vento"を手にするまで彼の作品は勿論彼の名も知らなかつた。したがつて彼の生立ちも知らない。たゞ巻頭の肖像によつて僅に彼がハンガリアに於ける中年の作家らしいと知つただけである。

譯者の紹介によると彼が文壇への初舞臺は諸名作や諸名作家を題材にとつた抱腹絶倒的な諷刺文であると云ふ。さればこそ彼のエス譯された諸短編にも彼獨特の骨を刺す辛辣味と奇想が現はれて居る。彼の長編のものとしては、ガリバー旅行記の續編とも云ふべき"Capillaria"や"Vojaĝo al Faremido"と云ふのがあつて、前者は憐むべき雄の蛆蟲が偉大にして精力凜々たる雌の快樂と利用のために生をつないで居る海底の女人國を描き、後者は完全に機械化された世界に於て金屬物が清潔にして調和ある生活を營み人間の如き有機物は不潔にして地上の病毒と見なされる世界を描いて居ると云ふ。これによつても知る事が出來る樣に彼は現實世界の中に溷濁する諸現象の中より拾ひ上げたものを絶對の世界に押し擴げて我々に見なれない新奇な世界を見せてくれる、そしてその中に現實に對する辛辣な批評が含まれて居るのである。次に紹介しやうと思ふ短編は恐らく彼の代表作ではないであらう、僅々三四頁にしてつきる小品に過ぎないけれども彼の着想、彼の描寫を知るに足る好個なるものとして敢て擧げる次第である。題は"Ŝminko", 此の字は neologismo であつて「顏料」「塗料」の意である。近代婦人がベタベタ顏になすりつけた白粉であり紅である。尙、譯者も斷つてある樣に此の飜譯は neologismo も多く esprimo も流暢でない所がある、けれども此は原作のすべての香氣と色彩とその陰翳を殘さんとする譯者の努力により故意にしたものだと云ふことである。次にあげたエス文の中にも用語の用例に變なのも見受けられるが其儘にして置く。

*　　*　　*　　*

Ankoraŭ iom da ruĝo ŝi disfrotis sur siaj lipoj, ŝminkis la okulojn per nigra krajono, forŝovis la buklojn de sia frunto kaj sin ekturnis antaŭ mi: ŝaŭmfalbaloj trombis, rubando flugis, diamanto ekbrilis, parfumo tremis.

〔彼女はなほ幾分か紅を唇になすりつけ、黑鉛筆で眼のふちを塗り、額に垂れた捲毛を拂ひのけて、私の面前に振り向いた。裾飾はさつと巻き上り、リボンは飛び、ダイヤモンドは燦と煌いて芳香はゆらめいた。〕

彼女が御化粧をすませると二人は自働車に乘つて外に出た。自働車は小川の緣をかけた、私は野性の花の匂ひを感じた。自働車は止つた。

En miaj brakoj mi portis ŝin supren sur la ŝtuparo, spiregante, per ŝvelantaj muskoloj. Pordo brufermiĝis, mi ankoraŭ aŭdis formorti en la korto la trenatajn paŝojn de la pordisto. Poste estiĝis silento — pordo, fenestro, fermitaj — Kaj mi sola kun mia kaptaĵo. Sur la kanapo ŝi kuŝis, jam senparole, kun fermitaj okuloj.

〔私は彼女を抱いて階段を上へと昇つた、息を切らし、筋肉を張り切つて。戸はガタンとしまつた。私はしばし門番の引きづつて行く足音が庭の中に消えて行くのを聞いて居た。それからシーンとなつた。扉、窓は閉じられ、私は獲物とたつた二人切りだ。長椅子の上に彼女は横つて居る、物も云はず眼は閉じて。〕

私は小さいランプに灯をつけて用心深く彼女に近づいて行つた。私の考へでは先づそつと彼女にキッスしやうと思つたのだ。が唇の上の紅の線に當惑してそれをこすり取る爲に化粧臺から鹿皮を持つて來た。

Facile ili defrotiĝis, sed sub ili mi ne trovis la molon de l' vivanta vizaĝo — tie troviĝis pli pala, sed pli malmola tavolo de farbo, postsigno de antaŭaj ŝminkoj. Jes, jen estis tio, mi memoris, antaŭ kelkaj monatoj, kiam unue mi vidis ŝin.

〔それは直ぐに落ちた、がその下に私は生きて居る顏の柔さを見る事か出來なかつた、その下にあつたのは一層蒼ざめたしかも一層ゴチゴチになつた色繪具の層であつた、前にぬりつけた顏料の跟跡であつた。そうだ、私は思ひ出した。これこそ數ケ月前、私が初めて彼女と逢つたあの時のものなのだ。〕

私はもつさ大きな鞣皮を持つて來て顔中をこすり始めた。次第次第に色繪具のマスクは剝げて行つた。私はそつさアルコールを垂らした。これですつかりなくなつた。そしてその下には一層やせこけた顔があつた。しかしそれも矢張色繪具であつたのだ。

Nun jam furioze mi komencis deŝiri ankaŭ tiun ĉi tavolon. La lampolumo vibris, mi jam apenaŭ vidis ion, nur la sentema palpo de miaj fingroj gvidis min. Denova fariĝanta tavolo, denove farbo. Mi ekkriegis kaj surverŝis la enhavon de la tuta botelo.

〔今度はもうまつ赤になつて私はこの色繪具の層をも剝がしにかゝつた。ランプの光はゆらめき私はもう殆んど何も見えなかつた。たゞ感の鋭い私の指が私を導いてくれたゞけだ。層は更に新になり、そして再び色繪具だ。私は大聲をあげて一罎全部のものを打ちあけてしまつた。〕

それから眞實に生きて居る彼女の顔を求めて私は捏れ擦りひつかきまはした。顔料は融けて私の指に傳つて流れ、私の兩手は色で染まり、長椅子の兩側は顔料が小川となつてゆつくり流れた。はつと氣がついて見ると私は已に長椅子の上の天鵞絨までも捏れてしまつたのだ。ぞつさして私はランプをつかみ手に取つて見た。

La korpo kuŝis sur la kanapo, sed kapo nenie troviĝis. Dissolvita, malpura farbomakulo restis anstataŭ ĝi, kiun suĉe ensorbis la veluro de l' kanapo.

〔身體は長椅子の上に横つて居た、が頭はどこにも見えなかつた。融け去つてしまつた汚ない色繪具の汚點がその代りに殘つて居て、長椅子の天鵞絨がチューチューとそれを吸ひこんで居た。〕

私の咽喉は乾いた。「えゝ、何をこんな事で愚圖愚圖して居るのだ。顔なんて云ふものは顔料がなくつたつて堅い層なのだ。私の望んで居るものは彼女の肉體なのだ!」 私は喘いだ。

Kaj per sola ekmovo mi fortiris la silkon, por avide ekkapti..... Sed mi ne trovis sub ĝi ĉemizon: estis alia robo...... jes, mi ĝin rekonis, en kiu ŝi pretersu uris min je la brako de tiu alia..... Ankaŭ ĝin mi disŝiris ..... nun sekvis kostumo..... jes, tiu, kiun ŝi ricevis de la bankiero.

〔私はさつさ絹を押し除けた、欲情に燃えて……けれども、その下に肌着はなかつた、あるのは他の衣服なのだ、そうだ私はこれを覺えて居る、この着物を着て彼女はあのも一人の奴の腕にすがつて私のそばをシャナリシャナリさ行き過ぎたのだ。此の着物も亦私は引き裂いた。今度出て來たのは衣裳だ、そうだ此は彼女が銀行家から貰つた奴だ。〕

この衣裳の下には派手な白麻の服があつた彼女の母が彼女を結婚させようさした時に買つてやつたものだ。

Meze mi deŝiris ĝin........ sub ĝi mi ja trovos ŝin? Kaj mi ŝovis la manon en la fendon..... iu mola, silka aĵo trafis en mian manon — ŝire mi ĝin eltiris, estis punta vindaĵo, malplena, kun pendantaj rubandoj — la vindaĵo, en kiun oni ŝin metis, ĵus naskitan.

〔眞中から私はそれを引きさいた……今度こそはその下に彼女が居るだらうか。私は裂け目に手を突込んだ……何か柔い絹の樣なものが私の掌の中に觸れた。千切つて私はそれを引き出した。それはレースの襁褓であつた、からでリボンの下つた襁褓、その中に生れ立ての彼女は包まれた事があつたのだ。〕

しかしながら彼女はどうしたのだ、どこに行つてしまつたのだ。彼女自身はどこにも居なくて、長椅子の上には皺くちやになりビリビリに引き裂かれた 襤 褸 布 が横つて居たのだ。

* * * *

此でこの「Ŝminko」は終りになつて居る。作者が何を云はうさしてるかは露骨過ぎる程はつきりさ判るであらう。そして此によつて大體作者の傾向がわかるであらうさ思ふ。

尙、序に付け加へて置き度いことは、彼、この Karinthy 自身がエスペラントに非常な興味を持ち、このエス譯の卷頭に彼の序言をのせて居る。これによつて彼のエスペラント觀を知るさ共に大づかみながら彼がどう云ふ立場に立つてものを見て居るかを知り、彼の作品を味ひ、理解するに重寶であるさ思ふから一部分彼の言葉を引用して見やうさ思ふ。

Teknikaĵo——la misterio (mistero?) de la religio de l' nova mondo, la moderna Miraklo! Teknikaĵo —— nova mitologio, nova genezo, plej nova testamento: dum ses tagoj ĝi rekreas la mondon kaj la homon, pli perfekte konstruante liajn orelojn kaj okulojn kaj buŝon, ol la ducent jarmiloj de la natura evoluo!

Teknikaĵo! Artefarita lingvo! Radio! Aeroplano!

Mi kredas ĝin——ĉar ĝi estas miraklo kaj neeblaĵo!

單語研究雜話

［8］ 川崎直一

32. krono.

學會大阪支部では Krestomatio を rondlegi しているが、色々面白い意見が出る。P. 73. の Tonathan Swift kaj la servanto 中の "krono" (monero) をある人は Skandinavio のクローネだ、又ある人はドイツのクローネだ、さがんばつた。この文中 pleŭronektoj (speco de fiŝoj=germana "Steinbutte") なんて註をつけてあるところを見るとこの原文はドイツ語でそしておそらく Zamenhof が譯したのだらう。故にドイツのクローネ說も確に成り立つが、しかし Swift の國籍から考えて見て angla krono=crown だとする說もまんざら捨てたものではありますまい。

33. regno unupotenca.

同じ本 P. 76. の Devjatnin の文 "........ Rusujo estas regno unupotenca kaj estas sub la sceptro de Imperiestro........". Potenco が ĉiuj (personoj) に無くて unu に有る、卽ち君主國の意味で、Devjatnin 一流の皮肉かも知れない。

Krestomatio には初期の文章が多いから、現在の雜誌等を讀みつけている者には、今使われない多くの esprimoj が珍らしく感ぜられる。

34. kvartalo.

Esp. の歷史は三期に分ける事ができる。

I. Rusa periodo.
II. Franca periodo.
III. Internacia periodo.

Kabe (parolado dum I-a Kongreso) によると "........ La lingvo gajnis de tio, ke la unuaj aŭtoroj estis Slavoj. La simpleco de Slava sintakso, la logika aranĝo de la frazoj en la Slavaj lingvoj, ilia absolute libera kaj natura vortordo estis senkonscie enkondukitaj en Esperanton de la Slavaj aŭtoroj kaj estis poste imitataj de neslavoj." とあるが、この時代の缺點は prepozicio を盛に prefikso に使つて elrigardi, subaĉeti 等變な言葉を作つた事で、Kabe は "........, kiuj estas teruraj nekompreneblaj idiotismoj, elvokantaj la ĉielan venĝon." と言つている。

又 *Esperanto-Praktiko*, marto, 1922 に Loy の La slava influo en Esp. がある。「Esp. において pure slavaj な vortoj は bulko, klopodi, kolbaso, moŝto, pravo, vosto 等で、slava origino ではないが slava formo で採用されたのは funto, kvartalo, marto, poŝto 等である。その他 x を ks, kz にした事、Estas necese, ke の如く副詞にする事、ad, ek を使いすぎる事も slava influo である。」

35. *La Revuo.*

フランスは由來ヨーロッパ文化の指導者である。Esp. も亦フランスには入つて一段さその光りをました。獨斷的ではあつたが、Esp. 最初の理論的文法を書いた Beaufront; Akademio を創めた Boirac; 前者の後をついで今尙熱烈に Fideleco al Fundamento を叫んでいる Cart; Hachette 書店を說いて雜誌 *La Revuo* を出さしめ以て貴重な Zamenhofaj verkoj に發表の途を與えた Bourlet; フランスの科學界に Esp. の同情者を作つた Méray; 雜誌 *Esperanto* を創めた Berthelot; スウイスの Hodler と共に U.E.A. を起した Rousseau; 盛に tradukoj をやつた Meyer, Noël; originalaj romanoj で有名な Vallienne; 其他宣傳方面には Archdeacon, Javal, Sébert, Chavet, Cense, Ménil; 言語の研究者には Couturat, Moch, Fruictier, Aymonier, Fauvart-Bastoul, Huet, Ladevèze, Verax, Grosjean-Maupin, Corret, Rollet de l' Isle 等春の野邊に百の花が咲き亂れた如くであつた。しかしこの美しい時代にも暗い影のあつた事を見のがしてはならぬ。"........ Se en la unuaj jaroj al ni mankis la teorio, post la apero de Francaj lernolibroj oni komencis tro zorgi pri la teorio, penis skribi tro klare kaj enkondukis multepezan stilon ...." (Kabe). そしてこの tendencaĉo は遂に Idista ribelo にまで進んだが、やがてこのさわぎもおさまり、再びその新な活動を世界に示そうとした時 mondmilito が起り、フランスは全く Esperantujo から退いた、平和の聲が聞えてきても彼女は未だ完全に目ざめない。Tradicia konkuranto である germanoj の最近のすさまじい奮闘振を francaj samideanoj はどんな氣持で見ているのだろう。

第三は現在の Internacia periodo である。世界各國の人々によつて使われる以上、言語はますますその國際性を深めて行く。

質疑應答

岡本好次

★問 1. Koreo は新撰辭典に「朝鮮人」となつてゐますが Privat や Stojan やその他一般の歐州の同志は Koreo (朝鮮)、koreano (朝鮮人) の樣に使用しますがどちらが pli preferinda ですか、英、獨、佛語でも「國土」を示してゐます。(松葉氏)

◇答 1. Koreo は朝鮮人と民族名とした方がエス語の精神にかなつてゐると思ひます。Japan も英、獨、佛語では「國名」ですが我々は japano を民族名とし Japanujo を國名としました。エス語發表の初期には Japano も國名であつたかもしれません (歐洲人は最近まで日本を支那の一部分位しか考へてゐなかつた) が今日では日本の同志も増加し、しかも我々日本人が常に japano, Japanujo を正當とみとめて使用してきたので今では Akademio でも之を認めてゐますが Koreo の方はまだ同志が少いので koreo, Koreujo が認められず Koreo, koreano が歐洲では依然として優勢の樣です。併しエス語の慣例に從へば aparta gento が居住してゐる場合は常に之をよぶに民族名を基本としてゐます。朝鮮には朝鮮人といふ特種の民族が數千年の昔から居り、しかも朝鮮語といふ別種の言語を語つてゐるのですから koreo を「朝鮮人」とし、Koreujo を國土をよぶ名とした方がよいと思ひます。我々東洋の同志は歐洲人の蒙をひらくために大いに koreo, Koreujo を使用せねばならぬと考へます。

★問 2.「着いたら手紙を下さい」を單純時で譯するとどうなるか。(以下全部同氏)

◇答 2. Skribu al mi, kiam vi alvenos tien. とすればどうでせう。こんな際態々 estos alveninta と混成時を用ひない方がよくはないでせうか。

★問 3. bazi は他動詞ですか、自動詞ですか、1927 年度 U.E.A.-jarlibro には二樣に用ひられてゐる。

◇答 3. 他動詞です。「新撰辭典」の譯語「基礎を置く」は他動の意味でかいたのです。Z 博士の用例に esti bazita sur io といふ文例があるにみても。Bennemann の辭典に Sur kio vi bazas tiujn asertojn? といふ文例があげてあります。自動詞ではありませんが一般の他動詞とは一寸ちがつてゐる樣に思はれます。

★問 4. disiĝi kun, apartiĝi kun といふ樣な用法をみうけましたが kun を使はないで de を使ふ方がよくないでせうか。

◇答 4. 御説の通り de を使つたがよいと思ひます。

★問 5. 師範學校の意に normala lernejo といふのは anglismo でよくないと思ひますが pedagogia lernejo は如何。

◇答 5. Normala lernejo は理窟にあはない稱呼ですが英、佛語でも normala を用ひ獨語でも Musteranstalt (modela instituto) といふのですから一般に normala lernejo を使用する向も多い樣です。併し本當は instruista lernejo か pedagoga lernejo (詳しくば lernejo por instruistoj aŭ pedagogoj) がよいと思ひます。pedagogio は「敎育學」といふ意味にも用ひられる樣ですから pedagoga lernejo の方がどうかと思ひます。併し師範大學の如き譯語に到つてはまた六ヶ敷ですね。兎に角各國の學制が一定してゐませんから厄介です。

★問 6. Dativa verbo の pasiva formo について詳細に御説明願ひます。sufikso "-it'o" が必ずしも「者」を示さぬならば instruato の意は二通りに解し得られると思ひます。

◇答 6. これについては七月號 223 頁の「或種の動詞の二重の意味」と「分詞接尾字の意義」(共に Z 博士の答辨) を御覽になればよいと思ひます。御説の樣に "Mi instruas al li Esperanton." から "Esperanto estas instruata de mi al li." と云へる。卽ち Esperanto は instruato といへようし "Mi instruas lin pri Esp." から "Li estas instruata de mi pri Esp." から li をも instruato といへませうが ato, ito 等は (本來 ulo 又は aĵo をさすが) 大體 Z 博士の述べられた樣に ulo をさすのが普通ですから instruato といへば「敎へらるゝ人」とみればよく Esp. 卽ち「敎へらるゝ物 (學問)」をさす時は instruataĵo といはねばならないと思ひます。instrui にはこういふ風に二樣になる事もありますがこれは殆んど例外で大抵の動詞は例へば "Mi donis libron al li." といふ文から mi は "doninto" で libro は "donitaĵo" であつて li は donito でもなんでもありません。

おことわり――學會宛、小生宛の御質問の御返事が大變遲れてゐますが松本淸彦君にお願して手傳つてもらつてをります。

IMPRESO DE AŬSTRALIO

〔濠洲印象記〕

(Eltiraĵo el rondiranta letero)

de Pastro Inocento Seriŝev. (ruso en Aŭstralio)

Laboristo—jen kio reliefe[1] altiras la atenton de l' novealveninto[2] al Aŭstralio; kaj tio estas tute komprenebla, ĉar Aŭstralio ja estas lando de laboristoj, lando de laborista registaro.[3] Labortago[4] komenciĝas je la 7-a (?) matene kaj finiĝas je la 5-a ptgm.[5]; je la 12-a okazas unuhora (ialoke $\frac{3}{4}$ hora) intertempo por manĝo. Kaj jen, dum ĉi-tiuj horoj estas observeble, kiel gelaboristoj, konvene bone vestitaj kvazaŭ veraj ĝentilhomoj[6] kaj ĝentilvirinoj, marŝas al la tagaj laborejoj aŭ revenas el laborejoj kun mansako[7]—tiuj saketoj estas karakterizaĵoj[8] de ĉi-tiea urba gelaboristaro, ĉar en ĝi troviĝas laborvesto kaj ilaro por laboro;[9] irante sur stratoj vi ĉie vidas centojn, milojn da irantaj kaj en aŭtobusoj[10] veturantaj gelaboristoj kun saketoj en manoj. En la pormanĝa[11] horo vi povas observi la alian scenon—ĉe muroj kaj pordegoj aŭ pordoj de ĉiu domo, kie troviĝas aŭ laboristoj aŭ servistoj, servantoj aŭ oficistoj, sidas sur trotuaroj[12] laboristoj, manĝas, tetrinkas[13] kaj fumas; tio estas ilia mallonga pormanĝa ripozo; veturi hejmen estas ja maloportune; tial ili amasiĝas rifuĝante[14] apud bariloj,[15] muroj kaj pordegoj aŭ pordoj, sojloj.[16] Plejmulto da laboristoj dum la nelabortempo[17] estas sin vestanta tiamaniere, ke vi ne supozus ilin esti manlaboristoj:[18] kravato,[19] kolumo[20] estas preskaŭ nepra apartenaĵo[21] de viro. Kaj ne tiel ofte estas renkontebla laboristo en senkravata ĉemizo.[22] Tamen, mi devas konfesi, ke rilate al vesto[23] (kostumon) tie ĉi estas sufiĉe libere (cetere,[24] inter certaj limoj[25])—kelkaj paŝas aŭ veturas sen kravato, sen jako[26] aŭ sen veŝto.[27] Pago por laboro tie ĉi estas tiom grande alta (ĝi egalas trioblon de minimumo de l' vivo[28]), ke laboristoj ĝenerale[29] vivas prospere[30] (se ili nek drinkas, nek ĉasas[31] kaptante surstrate[32] "noktajn papiliojn"[33]), posedas en bankoj monŝparaĵojn,[34] la kelkaj proprajn domojn, aŭtomobilojn. Kelkaj laboristoj havas vizaĝojn tute aŭ sufiĉe inteligentajn,[35] sed la aliaj havas vizaĝojn tute krudajn,[36] neinteligentajn al similajn niaj tipaj[37] rusaj laboristoj. Inter gelaboristoj tre disvastigita[38] estas drinkado, ebriiĝo. Drinkejoj ĉi tie estas vere sur ĉiu paŝo,[39] en ĉiu angulo; en ĉiu kvartalo[40] (interstrata domaro)

1. 際立つて明らかに。 2. nove'al'ven'into 新來者。 3. 政府。 4. 一日の勞働時間。 5. 午後 (post'tag'meze)。 6. ĝentil'homo ジエントルマン。 7. 手携袋(man'sako)。 8. 特徴。 9. 道具一式。 10. 乘合自動車で。 11. por'manĝa。 12. 歩道。 13. trinkas teon。 14. 身を退けて。 15. 塀。 16. 門口。 17. 休の時。 18. 筋肉勞働者。 19 ネクタイ。 20. カラア。 21. 附屬物。 22. (ネクタイ無しの) シヤツ。 23. 衣服の事については。 24. 但し。 25. 或る程度に於て。 26. 背廣の上衣。 27. チョツキ。 28. 生命を支へて行くに足る最小限度の三倍位の額に當る。 29. 一般に。 30. 豊に。 31. 狩る。 32. 街上で。 33. (夜の)蝶、夜鷹。 34. 貯金。 35. 聰明な。 36. 粗野な。 37. 典型的な。 38. 弘く行はれて居る。 39. 一歩毎に。 40. 一區毎に。

po 1, eĉ po kelkaj; stratanguloj mi vidas po 2, eĉ po 3, "*baroj*"[1] (tiel oni angle nomas drinkejojn). Ĉiu drinkejo havas en supra etaĝo[2] hotelon, kie plejparte[3] neniu loĝas. Mi ne scias ĝuste, ĉu "*baroj*" estas apartenaĵoj de hoteloj, aŭ ĉu hoteloj estas aldonaĵ[4]-apartenaĵoj de "*baroj*". Tabloj en drinkejoj plejparte ne troviĝas,[5] oni drinkas piedstarante ĉe drinkobretaro,[6] kvazaŭ veraj drinkuloj; tiurilate[7] la drinkejoj malbonege impresas kaj ne havas tian "poezion",[8] kian ekzemple havas rusaj aŭ japanaj restoracioj[9] aŭ bierejoj, kie vi, postulante botelon da biero, povas sidi komforte dum kelkaj horoj, legante gazeton aŭ libron, aŭ skribante leterojn. Drinkejoj *devas* esti malfermataj ĉiutage de la 6-a matene ĝis la 6-a vespere; dimanĉe ĉiuj drinkejoj estas fermataj kaj neniel vi povos tie aĉeti bieron aŭ vinon. Vere, kelkaj entreprenemuloj[10] sekrete vendas bieron (el sub vesto), vizitante la domojn (bone konatajn al ili), sed se ili aŭ iliaj aĉetantoj estos vidataj de policanoj, tiam la monpuno[11] ilin atendas. Kvankam de post la 6-a horo drinkejoj ĉiam estas fermataj, tamen vi ĉiam kaj ĉie povas observi vespere la grupojn de drinkejaj ĉiamuloj[12] sidantaj apud drinkejoj! Estas ja vere amuze observi ilin! Ebriaj[13] estas renkonteblaj tre ofte; iafoje, ne malofte, estas renkonteblaj falintaj, kuŝantaj ebriiĝantoj, vomantaj,[14] ĝis kiam policano ilin forkondukis[15] en policejon. Dum ebriiĝintoj paŝas, eĉ balanciĝante,[16] malfirme, ne falante teren[17], policano ilin ne tuŝas, sed se li falos, li nepre estos enpolicejigitaj,[18] kie oni lin sate[19] batos. Ĝenerale,[20] lokaj policanoj batemas[21] same kiel en Usono kaj Anglujo (nature, mi ne parolas jam pri Ĥinujo kaj Ruslando, kie policanoj nepre batas, kaj eĉ pri Japanujo, kie policanoj estas batemaj; ekzemple mi scias, ke ili batis rusan blindulon esperantistan S-ron Eroŝenko, arestinte[22] lin kaj ekzilinte[23] el Japanujo). Ĝis nun mi imagis naive,[24] ke en landoj de *angla* libereco regas plena netuŝeblo de persono[25] kaj *neniu* povas iun ajn bati puŝi kaj insulti[26] senpune! Sed, nun mi vidas mian naivecon laŭlibran.[27]

Multe min frapis ĉi tie apero sur stratoj de ebriaj junaj kaj nejunaj virinoj, ofte konvene vestitaj; marŝas tia virino, balanciĝante diversflanken, krias, mansvingas,[28] insultas. Ofte estas tie ĉi renkonteblaj tiaj virinoj, kaj ne pensu, ke ili estas prostituitinoj,[29] ofte ili estas honestaj virinoj; laboristedzinoj[30] aŭ hejmmastrinoj,[31] drinkintaj dum malesto[32] de edzoj. La moroj de ĉi tie, ĝeneraledirante,[33] ne estas tro moralaj[34] kaj severaj.

1. バー。2. 階、(二階三階)。3. 大部分。4. 添え物。 5. 酒場には卓がない、**trov'iĝi = sin trovi** =ある。 6. 飲み臺。 7. 此の點については。8. 詩味。9. 料理店。10. 何か一仕事しやうとする連中。11. 罰金刑。12. **drink'ejaj ĉiam'uloj** 酒場浸りの連中、の意と思ふ。 13. **ebriaj homoj** 酔っ拂ひ。14. **vomi** 嘔吐す。15. 連れて行く。16. ヒョロヒョロしながら。17. フラフラしてても地上に倒れるまでは巡査はどうする事も出來ぬ。18. **en'polic'ej'ig'ita** 留置所に入れられる。 19. いやと云ふ程撲る。20. 一般に。21. **estas batemaj**。 22. 逮捕して。23. 追放して。24. 無邪氣に考へて居た。25. 人格を拘束されない事。26. 罵る。27. 本による無邪氣さ(事實を知らなかつたための無邪氣さ)。28. **svingas manojn**。29. 淫賣婦。30. **laborist'edzino**。 31. **hejm'mastrino**。32. 不在。33. 一概に云へば。34. 道徳的。

Antaŭ nelonge,[1] tramveturante, mi observis jenan scenon: entramiĝis[2] iu ebria laboristo; ŝajne, li sidis dece, kviete, sed tramkondukisto[3] haltigis la tramon, ekkaptis lin je la jaka kolumo, malgraŭ lia kontraŭstaro, elĵetegis lin sur la pavimon,[4] kie tiu plenkorpe[5] senforta falis.... Jen al vi la netuŝeblo de persono en lando de libero! Ĝenerale, Aŭstralio estas lando de kontrastoj,[6] neatenditaĵoj[7] (por mi) kaj malaj al niaj ideoj.

........Pulso[8] de laboro, speciale ĉe regnaj, oficialaj entreprenoj,[9] ne estas multokaze tro rapida, eĉ estas ofte tute malrapida; laboristoj mem ne rapide laboras kaj ne permesas rapidi al novealvenintoj, speciale rusoj, ordinare ne maldiligentaj, avidaj[10] labori, estas ĉiam haltigataj de samlaborantoj: "Ne rapidu, ne laboru multe, imitu min!" Ni havis multajn okazjn observi laboron de ŝipaj ŝarĝistoj,[11] estas eĉ naŭze[12] rigardi: laboras ili tute testudrapide:[13] plejparte ili estas homoj maturegaj,[14] dikventraj, kun reŭmatismo[15] en piedoj, peze spirantaj: se en Rusujo, ŝarĝistoj estas peze laboregantaj kaj ilia laborego estas taksata kiel la plej peza,—tie ĉi tute male: ŝarĝistoj estas maldiligentuloj,[16] privilegiuloj,[17] malmulte laborantoj, kaj ilia laboro plejparte estas plej facila, sed ilia laborpago estas tiom granda, ke multaj revas[18] kiel por la idealo fariĝi ŝarĝisto.....

Okulfrapas[19] nin—rusojn—nekultureco[20] kaj krudmoreco[21] de lokaj loĝantoj. Tie ĉi oni ŝatas ordinare ne rajton kaj juston, sed forton: pugno,[22] bokso[23] decidas ĉion; se vi defendis[24] vin per bonega pugnobato, vi estas prava kaj akiras simpation de l' ĉirkaŭantoj tiel same de tiu, kiun vi faligis. Pugno decidas tutan aferon (sur strato). Batalon tie ĉi oni tre ŝategas, kaj se du homoj batalas, la homa aro rigardas avide, ankaŭ policano majeste[25] rigardas, sed ne malhelpas la batalon. Apud drinkejo ariĝas[26] junuloj kaj incitas[27] arogante[28] trapasantojn,[29] speciale alilandanojn:[30] krias, fajfas,[31] eĉ puŝas. Speciale aŭstralianoj malamas italojn kaj grekojn, kaj se oni vin opinias esti ĉu italo aŭ ĉu greko, oni aŭ batemas vin, aŭ ĵetegas en vian kapon botelon de biero. Sur neĉefaj stratoj de Sydney policanoj malestas, kaj tial al diboĉemuloj[32] estas granda vastejo,[33] kaj libero por ĥuliganado[34] en tiaj urbopartoj. Antaŭ nelonge estis tia okazintaĵo;[35] paŝas sur la strato je la 4-a ptgm. sabate du miaj rusaj amikoj, fratoj; ili estas tre ĝentilaj kaj bone edukitaj[36] rusaj junuloj; vidas ili, ke apud preterpasota[37] drinkejo amasiĝas junuloj, elirantaj el la drinkejo; la fratoj, sciante

1. 少し以前に。2. en'tram'iĝi 電車に乗る。3. 電車の車掌。4. 舗石。5. plen'korpe 身體中。6. 對照。7. ne'atend'it'aĵo 思いもかけぬ事。8. 脈搏。9. 官業。10. 熱望す。11. 船の荷積人足。12. (見るだけでも)嘔吐を催させる。13. 龜の樣な速さ。14. 立派な一人前。15. レウマチ。16. 怠け者。17. 特權ある者。18. 積荷人足になるのを理想として夢想して居る。19. frapas okulon 驚かす。20. 非文明。21. 風習の粗野な事。22. 拳骨。23. 拳闘。24. 防禦する。25. いかめしく。26. amas'iĝas 集る。27. 喧嘩を賣る。28. 傲慢に。29. 通行人。30. 外國人。31. 口笛を吹く。32. 放蕩無頼の徒。33. 暴れ場所。34. ? 。35. 出來事。36. 敎育を受けた。37. preter'pas'ota 通り過ぎやうとする。

jam lokajn sovaĝajn morojn, preferis iom flanke ĉirkaŭpreterpasi[1] la araĉon;[2] tamen, postlasinte[3] la aron, ili rimarkis, ke la aranoj[4] kurante ekpersekutas[5] ilin; la fratoj ekkuregis; tamen, ili estis rapide atingitaj kaj forte batitaj; unu frato, sin defendante, ricevis tian fortan ekbaton, per speciala fera kvarfingringo,[6] ke lia nazo estis rompetita;[7] nur la alkurinta[8] publiko malhelpis la pli sovaĝan batadon. La policano anoncita[9] ne povis helpi (la ĥuliganoj jam forkuris), nur diris: "Penu montri la kulpulojn, kaj ni punos ilin." Kiam iu ebriulo diboĉas en drinkejo, mastro elpoŝigas[10] revolveron,[11] kaj la "heroo" forlasas rapide la batalkampon.[12] Unufoje, irante sur la granda strato, mi vidis la jenon: amasiĝas homamaso kaj rigardas du virojn, kiuj, demetinte[13] la jakojn flanken, sur la strata mezo kiel du kokoj sin batalas per bokso; neniu policano estis, ĉiuj aŭtoj devis ĉirkaŭveturi; fine unu estis venkita;[14] li surpiediĝis,[15] manpremis[16] la venkinton, la ambaŭ surmetis la vestojn kaj pace disiris, ankaŭ la publiko. Ĉu ne sovaĝe? Oni rakontas, ke same estas en Usono kaj Anglujo. Homoj similas bestojn aŭ birdojn—kia abomenaĵo?[17] Absolute neniuj ekzistas rezonoj[18] por pravigi[19] tian pugnobatalon en kulturaj landoj.

Ne plene mi komprenas la kaŭzon[20] de malamo kontraŭ italoj kaj grekoj. Da italoj[21] ĉiujare alveturas en Aŭstralion kelkdekmiloj; ili faligas laborprezojn, ne aliĝas[22] al lokaj laborunioj,[23] kaj forte grupiĝas nacio; en la ŝtato Queensland ekzistas nun eĉ vastaj loĝejaregoj[24] de italoj, dissemitaj en granda areo;[25] tial eĉ (tre mirinde) registaraj[26] ordonoj por ili estas, oni diras, liverataj[27] en itala lingvo, ĉar ili ne komprenas la anglan. Okazis kelkfojaj sangkunpuŝiĝo[28] inter italoj kaj aŭstralianoj; en okazo de konflikto[29] ili ofte eltiras ponardon[30]—tion malŝategas la lokaj loĝantoj. Se al la plantejoj[31] de italoj alvenas aŭstraliano (anglo), petante laboron, oni lin demandas: "Ĉu vi parolas itale?" Al la nea respondo la italoj respondas jene: "Ni ne povas akcepti vin, ĉar tie ĉi laboras nur italoj, ili ne parolas angle, al vi estos (ankaŭ al ni) malfacile; ni ne povas vin akcepti." Ĉefe malamon kaŭzas la fakto, ke italoj ne asimilas[32] al si la anglan kulturon.[33]

Loka homamaso[34] tre strange impresas[35] min: oni miras ĉion, kio eĉ iomete ne estas komune uzata; kaj la miron oni evidentigas[36] per la plej nekultura, maldelikata maniero. Ekzemple, mi paŝas dum pluvado sub japana

1. 遠廻りして通る。 2. **ar'aĉo**。 3. 行き過ぎて。 4. **ar'anoj**。 5. 追撃す。 6. 四本の指を入れる指拔(?)。 7. 鼻がかけた。 8. 駈けつけた。 9. 知らせを受けた警官。 10. ポケットから出す。 11. ピストル。 12. 流石の豪の者も戰場を後に退却した。 13. 脱いで。 14. 負かされた。 15. **sur'pied'iĝis** 立上つた。 16. 握手した。 17. 何と云ふ忌むべき事だらう。 18. 理由。 19. 正當とする。 20. 原因。 21. **kelkdekmiloj da italoj** の **kelkdek**....を後に持つて來たもの。 22. 入會する(參加する)。 23. 勞働組合。 24. **loĝ'ej'ar'ego** 部落。 25. 面積。 26. **reg'ist'aro** 政府。 27. 發せらる。 28. **sang'-kun'puŝ'iĝo** 血鬪。 29. 爭鬪。 30. ヒ首。 31. 畑。 32. 同化さす。 33. 文化。 34. **hom'-amaso** 民衆。 35. 印象を與へる。 36. 明かにする。

ombrelo[1] (bela bambu-paperaĵo[2] oleumita[3]) aŭ en rusa ĉemizo[4] (kiel tiu de Leo Tolstoj) aŭ en rusaj longaj (soldataj) botoj. *Ĉiuj* (sinjoroj, sinjorinoj kaj fraŭlinoj, laboristoj kaj duonintelegentaj[5] homoj) ekhaltas kaj komencas ridi, moki, krii ion, montri per manoj kaj tiel plu. Estas ĉagreninde[6] kaj hontinde[7] pro tiaj homoj.... Ĉu ili neniam legis kaj aŭdis pri fremdaj landoj[8] kaj ties loĝantoj?[9] Ĉu en iliaj vendejoj[10] mi ne vidis (do, ĉu ili ne vidis tie) botojn, kiujn, iliaj virinoj iufoje[11] uzas? Ĉu japana ombrelo estas tia mirindaĵo kiel *negro*?[12] Ĉu ili neniam vidis fotojn[13] de Leo Tolstoj en "rubaŝka" (rusa ĉemizo)? Ĉu ili nenion legas el fremdlanda literturo?! ....Tie ĉi senlime[14] regas la sento de ariĝeco,[15] malesto de individualismo.[16] Modo,[17] "tiel estas konvene",[18] "tiel aŭ tio malkonvenas"[19]—jen kio regas la vivon de aŭstraliano. Eble en aliaj landoj same estas, sed mi nun parolas nur pri aŭstralianoj.

Samtempe, la loka popolo estas gaja, afabla, ridetema. Pri gastameco[20] mi devas diri, ke el ĉiuj popoloj la plej gastamemaj estas, ŝajnas, nur rusoj, japanoj kaj diversaj siberiaj nomadoj[21] (burjatoj, altajanoj, kirgisoj kaj aliaj), ankaŭ mongoloj.[22] Rusoj en Francujo plendas, ke ili neniam povas trafi domojn de iliaj francaj "amikoj"; des pli en Anglujo—hejmo estas tia sanktaĵo, ke pli facile estas trafi en ĉielon ol en la domon de angla "amiko". Tiun samon ni, rusoj, spertis[23] en Aŭstralio. Neniam mi estis invititaj en la domon por ĝui familian vivon de aŭstralia "amiko". Oni vin regalos[24] en restracio, sed ne hejme. Tute alia estas la afero en Japanujo kaj Rusujo. Por la gasto estas en Rusujo estas malfermitaj ĉiuj ĉambroj, li povas eĉ pasigi[25] la nokton kaj ĝui la intiman vivon de la mastro. En Japanujo ankaŭ mi ĉiam estis invitata vizitadi la amikojn kaj pasigis ĉe ili noktojn, tute laŭ rusa maniero. Kaj ni ŝatas nur tiujn "varmkorajn" popolojn, kiuj similas[26] nin. Tiurilate loka popolo estas malvarma. Eĉ se[27] vi alvenos al iu pro afero, oni vin ne invitas en la ĉambron, sed, kiel hundon, tenas ĉe la pordo; la mastro aŭ mastrino staras ĉe la pordo, tenante ĝin,[28] por ke vi ne eniru, kaj demandas vin. Tiel oni agas ne nur rilate al fremdnacianoj,[29] sed ankaŭ al samnacianoj.[30] Estas al ni abomene vidi, ke iu bona konatulo[31] alvenis[32] al iu aŭ preteriras,[33] kaj alvokita[34] de la mastrino, ekhaltas, kaj neinvitita por eniri, li staras longe ĉe la pordo kaj konversacias.[35] Tiurilate nomadoj de Siberio estas multe pli kulturaj, ĉar ili pensas, ke

1. 傘。 2. bambuo 竹。 paper'ajo 紙製品。 3. ole'um'ita 油をぬつた。 4. 襯衣。 5. du'on'inteligenta 6. なさけない。 7. 耻ずべき。 8. 外國。 9. loĝ'antoj 住民。 10. 賣店。 11. 何時か。 12. 黒人。 13. fotografaĵo (寫眞) の略語。 14. 無限に。 15. ar'iĝ'eco 雷同(?)。 16. 個人主義。 17. 樣式。 18. そうしたがふさはしい。 19. ふさはしくない。 20. gast'am'eco 客好き。 21. nomado 遊牧民。 22. 蒙古人。 23. 經驗する。 24. 御馳走する。 25. すごす。 26. 似てゐる。 27. たとへ....でも。 28. 戸を手にして。 29. fremd'naci'ano 外國人。 30. sam'naci'ano 同國人。 31. kon'at'ulo 知人。 32. al'veni 到着す。 33. preter'iri 傍をよぎる。 34. al'voki よびよせる。 35. 會話する。

gasto estas sankta homo, ke gastamo estas devo de sankteco. La nomadoj sekvas la ekzemplon de fama Abrahamo en Biblio, sed la eŭropaj popoloj sekvas la malan vojon. Eĉ samideanajn domojn mi neniam vizitis nek en Londono, nek en Francujo, nek en Aŭstralio.

Ne ŝatas mi ankaŭ lokan hipokritecon.[1] Estas malpermesite[2] pro kutimo al hipokrita moralo,[3] ke gepatroj lui[4] unu ĉambron kun siaj pli ol 10-jaraj infanoj, ĉar estas ne konvene de morala vidpunkto,[5] se geedzoj dormos, kiam en la ĉambro estas infanoj. Ankaŭ laŭ sama rezonado[6] estas malpermesite, se en ĉambro de geedzoj pasigos la nokton ilia amiko aŭ amikino aŭ gasto. Eĉ du viroj ne povas trovi ĉambron, se ili volas havi unu dupersonan liton,[7] ĉar la hipokrituloj suspektas[8] ilin je samseksa amo.[9] Kiam mi kaj mia amiko, ne havante monon kaj tempon por longa serĉado de ĉambro en Sydney, estis vizitintaj unu domon, kie unu ĉambro estis luebla,[10] ni trovis tie unu litegon; la ĉambro plaĉis al ni kaj ni volis ĝin preni; sed la mastrino diris, ke ĝi estas por geedzoj, kaj ke ŝi ne havas du litojn por unuopuloj;[11] mi diris, ke ni konsentas dormi sur unu lito, kiu estas ega; la mastrino teruriĝis[12] kaj kategorie[13] rifuzis. La samon spertis[14] multaj rusoj. Ankaŭ kelkaj rusoj perdis la ĉambron pro tio, ke[15] ilia amikino aŭ amiko pasigis la nokton, ĉar aŭ[16] okaze tro pluvegis por reveni hejmen,[17] aŭ estis tro malfrue[18] kaj tramo[19] ne funkciis.[20] Matene mastrinoj alvenis kaj petis forlasi[21] la domon. Kiam venis mia edzino, por eklogi kun mi en la pensiono,[22] unu el la du mastrinoj diris kun terur-miro;[23] "Ja vi estas geedzoj (ili estas fraŭlinoj, tamen ne timas aludi[24] pri seksaj rilatoj per siaj frazoj! ....), kaj via knabo estas 12-jaraĝa,[25] do kial vi kunloĝas en *unu* ĉambro!?" Sia fratino klarigis[26] al ŝi, ke ĉe rusoj *tio* ne estas malkonvena;[27] ĉar ili tiutempe[28] ŝatis mian laboron, ili dezirante ne perdi min, konsentis je tia malkonvenaĵo,[29] kredeble[30] opiniante,[31] ke ni estas vera barbaro.[32] Kiam unufoje venis al mi en la pensionon mia rusa amiko, kiun mi longe ne vidis, li sidis tre longe vespere kaj estis neeble reveni en la Urbon; certe ni proponis al li nokti[33] en nia ĉambro; mi kun edzino dormis sur dupersona lito, la knabo sur sia lito apud ni, la amiko sur la planko,[34] kie ni preparis bonan liton, apud mia filo. Estis tre bone kaj konvene; tamen matene la mastrino terure diris: "En via ĉambro pasigis la nokton viro, via amiko, maldece, li ne devas plu tion fari." Kvankam mi

1. 僞善。 2. **mal'permes'ite** 許されぬ。 3. 道德。 4. 借りる（家、部屋等を）。 5. **vid'punkto** 見地。 6. 理由、條理。 7. 二人用寢臺。 8. 怪しむ。 9. 同性愛。 10. **lu'ebla** かりられる。 11. **unu'op'ulo** ひとりもの。 12. 恐れた。 13. 直言的に（否應なしに頭から）はねつけた。 14. 同じ事を經驗した。 15. **pro tio ke～** ～のために。 16. **aŭ....aŭ....** 或は....或は....。 17. 家に歸るには餘り大雨がふつた。 18. 夜がふけすぎて。 19. 電車。 20. **ne funkciis** 用をなさぬ（夜が遲いので動かぬ事）。 21. 去る。 22. 寄宿舍。 23. 恐怖と驚駭。 24. ほのめかす。 25. 十二歲。 26. 說明した。 27. 不都合。 28. 當時。 29. **mal'konven'aĵo** 不都合な事。 30. **kred'eble** 多分。 31. と考へて。 32. 野蠻人。 33. とまる。夜をすごす。 34. 床（ユカ）。

klarigis la cirkonstancojn, sed tio ne helpis. Kaj ni klarigis al ĉiuj geamikoj, ke ili neniam pasigu la nokton ĉe ni en la lando de plej liberaj homoj, angloj. Do, ĉu ni, rusoj, ne estas pravaj, pensante, ke ni estas vere la plej libera simpla purkora popolo en la mondo?! Kaj mi aldonas: ilin sekvas japanoj. Kia granda diferenco de psikologio[1] de du popoloj, la rusa kaj la angla! Angloj (ĉar aŭstralianoj estas plejparte[2] elanglujaj[3] elmigrintoj[4]) neniam komprenos la mirindan animon de rusa popolo, kaj siavice rusoj neniam komprenos la strangan animon de angla popolo: abismo[5] dividas ilin. Jen kial[6] rusoj estimas anglojn pro ilia sistemo de politika aranĝo[7] kaj kelkaj ecoj, sed neniam amis nek amos ilin. Japanoj estas multe pli proksimaj al ni, ol angloj, francoj, usonanoj. Mi scias la fakton: en la ĉambro de nuna mia dommastro (polo, ruse parolanta[8]), kie loĝis li, lia edzino kaj du iliaj knaboj 6- kaj 8-aĝa,[9] loĝis dum unu monato mia amiko (instruisto); kion dirus angloj pro tio? (se ili scius) (ili ne sciis tion.) Oni diras, ke, se polico[10] ekscius tion, la polo estus severe punata[11] laŭ leĝo.[12] Tamen ne pensu, ke la loka popolo estas vere tre morala; ĝi ne estas tia, eĉ ĝi ne estas sufiĉe morala; ĉiam ni spertas tion. Kvankam prostitucio[13] ne estas permesita oficiale kaj domoj de prostituitinoj[14] ne ekzistas, tamen la malĉastulinoj[15] malkaŝe[16] kaptas virojn sur stratoj, atendas la invitojn en stratanguloj, ekzistas "lueblaj ĉambroj por 1–2 personoj por unu nokto en ia ajn tempo" kaj tiel plu....; lokaj servistinoj estas tre malmoralaj kaj rakontas tiajn anekdotojn, kiajn[17] en mia barbara lando povas rakonti nur viroj. ——[LA FINO]——

1. 心理。 2. 大部分。 3. el'angl'uj'a 英國からきた。 4. el'migr'into 移民。 5. 深淵。 6. だから(それがそのわけだ)。 7. 政治組織。 8. rus'e parol'anta ロシヤ語を話す。 9. 六歳及八歳の兩兒。 10. 警察。 11. 罰せらる。 12. 法律。 13. 賣笑。 14. prostu'it'ino 賣笑婦。 15. mal'ĉast'ul'ino 淫女。 16. 公然さ。 17. 下女が我が國では男子のみしか話さぬようなそんな話を平氣でする。

SKIZO SURVOJA

N. H.

Mi staris tuj apud la konduktoro sur la perono de tramvojo terure homoplena. De nervemaj vizaĝoj de urbeganoj rigardoj komplikiĝis antaŭ miaj okuloj.

La vagono ekhaltis ĉe Hongoo-sanĉoome. Ĉe la enirejo homoj sin puŝis unu la alian por elvagoniĝi kaj mi, jam sufiĉe malgrasa, estis porte premita kvazaŭ unu folio. Subite mi aŭdis el la interno virinan voĉon rapide eldirantan "Orimasu-jo*" (laŭvorte, mi elvagoniĝas!) kaj samtempe eksplodon de ridegoj. Kun dubo mi rigardis homojn sin puŝante elirantajn antaŭ mi. Tuj poste mi vidis sin ŝovantaj kun granda malfacileco du kotolikajn monaĥinojn alilandajn vestitajn per blanka kufo kaj nigra vesto, kiuj kun la vizaĝoj tute ruĝaj evitis vidi senesprimajn ridetojn de homoj, kiuj tamen ilin rigardas. Ili estis ne maljunaj. "Orimasu-jo!" estis kriita de unu el ili, kiuj timis ke la vagono ekveturos antaŭ ilia eliĝo. Tion homoj ridis ne malice sed impertinente sendube, eble pro tio, ke ili aŭdis tute neatendite iom strangakcentan japanan lingvon de fremdaj monaĥinoj.

Tamen, miaparte mi sentis mian vizaĝon pli kaj pli ruĝiĝanta vidante ilian hontegon. Mi bedaŭris ilin, pensante pri la influo, kiun donos la hontego al ilia homa koro. Mi petis ilin en mia koro ke de nun ili prenu siajn seĝojn plej proksime kiel eble al la enirejo.

FATALISTO

—[7]—

〔國木田獨歩原作『運命論者』連譯小說第七回〕

[Laŭ peto de l' redaktoro tiun ĉi noveleton tradukas dekkelkaj eminentaj sinjoroj laŭvice.]

Ĉapitro 4.

tradukis D-ro Riiti Kawakami, lektoro de Keiō Universitato.

KIAM mi estis 16-jara, mia patro ricevis ordonon preni novan postenon en Tokio kaj la tuta familio transloĝiĝis kun li al Tokio, sed oni lasis min resti sola en la pensiono de Okajama Liceo.

La rememoro pri mia vivo en la sekvantaj tri jaroj certigis al mi ke mi ĝuis veran vivon en tiu ĉi mondo nur dum tiuj jaroj en la liceo.

Ĉiuj lernantoj estis bonaj por mi kaj mi reakiris liberecon de l' koro kaj evitis la brakojn de l' malbenita fatalo kaj la dubo pri mia destino iom post iom malaperis kaj la melankolia karaktero fordegelis, kiel neĝo, kaj al mi revenis gaja junula humoro.

En la aŭtuno, kiam mi estis 18-jara, neatendite mia patro skribis leteron al mi kaj ordonis min ke mi tuj venu al Tokio. Mia trankvila koro tute konfuziĝis kaj mi preskaŭ ne povis kompreni lian veran intencon, kaj mi volis responde skribi al la patro por peti lin ke li lasu min resti ĉi tie ankoraŭ unu jaron por fini la tutan kurson de l' liceo, sed mi rekonsiderinte ŝanĝis la opinion kaj tuj venis al Tokio. Apenaŭ mi alvenis al mia hejmo, en Koojimaĉi, mia patro min vokis al sia ĉambro kaj diris, "Mi havas aferon kun vi interkonsiliĝi. Ĉu vi ne volas studi de nun jursciencon?"

Neniam atenditaj vortoj estas tio. Per granda miro mi nur rigardis la vizaĝon de mia patro kaj ne povis eldiri iajn vortojn. "Unuafoje mi volis skribi al vi detale sed tio estas tro maloportuna, kaj mi vin alvokis. Eble vi volas fini la tutan kurson de l' liceo kaj plie studi en universitato. Sed vi ankaŭ bone scias ke estas des pli bone, ju pli frue oni povas subteni sian vivon. Kaj do vi de nun eniru en iun privatan jurlernejon kaj post tri jaroj vi finos la kurson. Kaj vi ricevos ekzamenon, por la diplomo de advokato. Se vi sukcesos la ekzamenon, mi vin rekomendos al mia konata advokato. Vi praktiku kelkajn jarojn ĉe lia oficejo kaj poste vi malfermu

---

〔運命論者〕——連譯小說第七回

【註】 **ordono preni novan postenon en Tokio** 東京へ轉任すべき命令。**trans'loĝ'iĝi** 轉任す。**pensiono** 寄宿舍。**liceo** 中學校。**re'akiri** 再び獲る。**mal'ben'ita** 呪はれたる。**melankolia** 陰鬱な。**for'degeli** とけさる。**jun'ula humoro** 青年の氣質。**ne'atend'ite** 不意に。**konfuz'iĝi** 當惑す。**tuta kurso** 全課程。**apenaŭ……** ……するや否や。**inter'konsil'iĝi** 相談す。**jur'scienco** 法律學。**mal'oportuna** 不便。**diplomo** 免許狀。**advokato** 辨護士。**rekomendi** 推薦す。**praktiki** 實地になす。**dign'o'plena** 堂々たる。**renvers'iĝi** ひつくりかへる。**ne'parenca** 親戚でない、他人の。**sen'rilata** 無關係の。**sub'ulo-parazito** 書生、居候。**naturo** 本性。**mal'kovri** 曝露す。**tombo** 墓。**rekoni** 氣付く。**postuli** 要求す。

vian propran oficejon. Tiam vi atingos vian celon; kaj vi jam estos dignoplena sinjoro, havante malpli ol 30 jarojn. Kiel vi opinias? Tio estas la plej proksima vojo!" Aŭdinte tiujn vortojn mia koro tute renversiĝis. Vi tion povas facile kompreni?

Tiuj vortoj estas ja vortoj de neparenca homo. Tio estas nur kompatemo de senrilata homo. Tio estas la favoro, kiun la mastro prezentas al la subulo-parazito.

Goozoo Oocuka fine revenis al sia naturo. Senintence kaj senkonscie li malkovris sian propran naturon.

Dum tri jaroj li min lasis ekster la hejmo kaj karesis Hidesuke, sian propran filon, ĉe si. Proksimigante lin al la tombo, la pordo, per kiu oni devas reveni al sia naturo, tiuj ĉi tri jaroj lin revenigis al sia naturo. Sed li mem ankoraŭ ne povis rekoni ĝin, kaj li volis vidi filon en mi kaj patron en si mem.

Kaj tial mi jam ne povis diri mian deziron al li kaj mi mallonge respondis ke mi akceptas ĉion, kion ajn li postulas, kaj mi forlasis la ĉambron.

Ne nur la patro sed ankaŭ la patrino tute ŝanĝiĝis. Tagon post tago mi kredis pli kaj pli la sekreton de mia destino. Kaj ju pli mi rigardis la sintenadon de l' gepatroj, des pli grandiĝis mia dubo. Iufoje mi pensis ke tio estas mia antaŭjuĝo, sed kiam mi rememoras la fakton ke la patro min persekute demandadis en la ĝardeno, kiam mi estis 12-jara, kaj kiam mi meditis pri ĉio, mi ne povis ne dubi la sekreton de mia fatalo.

En ĉagreno mi pasigis eble tri monatojn en la jura lernejo en Kanda. Iun tagon mi decidis demandi la patron pri la dubo de mia sekreto.

Apenaŭ mi revenis vespere hejmen de la lernejo kaj finiĝis vespermanĝon, mi iris al la ĉambro de mia patro; li skribis leteron sub la lampo kaj rimarkinte min, li demandis al mi, "Kion vi volas?" Sed li ankoraŭ daŭrigis la skribadon. Mi silente sidis ĉe la fajrujo apud la patro. Tiam eble de l'ĉielo nubokovrita falis pluvo, mi aŭdis pluvgutojn batantaj la tegmenton. Li forlasis plumon kaj subite turnis sin al mi kaj demandis ĝentile.

"Kion vi volas?"

この連譯小説は毎回交代で諸先生にお願ひして飜譯していたゞいてゐます。今回は慶應義塾大學醫學部講師川上理一博士にお願ひしました。先生は望月博士と共に慶大の醫學エス會を指導して大いにエス運動のためつくして下さつてをります。

---

forlasi 去る。 tagon post tago 日一日と。 ju pli .... des pli ～ ....すればする程益々～。 antaŭ'juĝo 豫斷、臆斷。 persekute 追求的に。 pas'igi すごす。 daŭr'igi つゞける。 fajr'ujo 火鉢。 nub'o'kovr'ita 雲で蔽はれた。 pluv'guto 雨の雫。 tegmento 屋根。 tuta kurso de liceo 中學校の全課程。 neniam atend'itaj vortoj 嘗て豫期せなかつた語。 plej proksima vojo 近道。 Tiuj vortoj estas ja vortoj de neparenca .... これ實に他人の言葉です。他人の親切です。居候の書生に主人の先生が示す恩愛です。 Proksimigante .... 人間が其天眞に歸るべき門、墳墓に近づくこと三年、此の三年の月日は彼をして自然に返らしたのです。 li volis vidi filon en mi .... 僕を子として見自分を父として見ようしてゐる。

AEROLOGIA OBSERVATORIO

Fraŭlinoj K. Sekiguĉi kaj R. Nakamura.

LA 22-an de majo ni partoprenis la ekskurson, kiun entreprenis Eskulapida Klubo, al la Aerologia Observatorio en Tateno, Ibaraki Gubernio, kies estro estas D-ro Ooiŝi, mondfama samideano tre fervora. Kiel vi bone scias, la observatorio publikigis sian grandegan raporton en Esperanto en la lasta jaro kaj tiris grandan atenton de tutmondaj sciencistoj.

Kiam frumatene ni ĉiuj, dekkvin, kolektiĝis ĉe Ueno Stacio, nubo ŝirmis la tutan ĉielon kaj eĉ pluvo ekplaŭdetis. En la atendejo ni estis tute maltrankvilaj pro la timo, ĉu ni perdus pro pluvo tiun bonan ŝancon ĝui kvietecon de l' naturo for de bruego kaj tumulto de l' urbego. Kiam la sonorilo anoncis al ni la ekveturon de l' vagonaro, kiun ni devas preni, ni eniris en ĝin tute malvigle. Sed la ĉielo ne tiel malbenis nin; dum la veturado la nuba vualo dispeciĝis kaj malaperis de l' ĉielo kaj eĉ la sunradioj ekfalis sur nin tra fenestrovitro de l' vagonaro. Baldaŭ ĝi haltis ĉe Stacio Arakaŭaoki kaj ni elvagoniĝis. Trapaŝinte la straton de l' urbeto, sur kies flankoj staras dekkelke da butikoj, ni vidis antaŭ ni etendiĝantan grandegan freŝverdan ebenaĵon Musaŝinon, en kiu oni ne povas trovi eĉ unu dometon kaj oni vidas nur verdan arbaron, verdan kampon! Verda estas ĉio, kion oni vidas tie!

Por atingi la observatorion ni devis marŝi pli ol unu horon sur malgrandaj vojetoj en la vasta kampo, kaj ni timis, ĉu ni perdus la ĝustan vojon, sed dank al multaj montriloj, sur kiuj estas skribitaj la direkto al la observatorio en Esperanto. Ni marŝis antaŭen kun verdaj standardetoj en milda venteto flirtantaj, laŭdante la pitoreskan pejzaĵon. Pepkantoj de l' alaŭdoj aŭdiĝas de ie en la ĉielo. Ĉe vojkruciĝo ni trovis Sinjoron Ooiŝi, kiu afable venis tien por renkonti nin. Nun ni enpaŝis en Esperantujon. Eĉ sur la muro de malgranda kukobutiketo, kiu staras sola meze de l' kampo, ni vidis afiŝon de la XIX-a Kongreso en Dancigo. Fine vidiĝis eleganta konstruaĵo en foliaro sur la monto. Tio estas la Observatorio.

Sur la ŝtonkolono de l' enirejo ni legis la surskribon "Aerologia Observatorio".

高層氣象臺訪問記

【註】 **part'o'preni** 參加す。 **ekskurso** 遠足。 **entrepreni** 企てる。 **aerologia observatorio** 高層氣象臺。 **gubernio** 縣。 **publik'igi** 發表す。 **tut'monda** 全世界。 **scienc'isto** 科學者。 **fru'-matene** 早朝。 **kolekt'iĝi** 集る。 **ŝirmi** 蔽ふ。 **ek'plaŭd'eti** 小雨の降る音のする事。 **atend'ejo** 待合室。 **mal'trankvila** 不安の。 **ŝanco** 好機。 **bru'ego** 喧囂。 **tumulto** 騷擾。 **sonor'ilo** ベル。 **mal'vigle** したしたさ。 **dis'pec'iĝi** こまごまになる。 **sun'radio** 日光。 **fenestr'o'vitro** 窓ガラス。 **el'vagon'iĝi** 下車す。 **butiko** 店。 **etend'iĝi** ひろがる。 **freŝ'verda** 新綠の。 **eben'aĵo** 平野。 **perdi vojon** 路を失ふ、路を迷ふ。 **dank'al** のお蔭で。 **montr'ilo** 道しるべ。 **flirti** 飜へる。 **pitoreska** 繪の樣な。 **pejzaĝo** 景色。 **pep'kanto** さへづり歌。 **alaŭdo** 雲雀。 **aŭd'iĝi** きこえる。 **voj'kruc'iĝo** 道の四辻。 **afiŝo** ビラ。 **eleganta**

Tra la pordego ni eniris en la korton inter arboj kaj florbedoj. Antaŭ ĉio ni devis kontentigi nian stomakon malsatan. Post la manĝado Gesinjoroj Ooiŝi gvidis nin al la laboratorioj ĉirkaŭataj de verdaĵoj, kiuj staras sur la korto tie kaj tie. Sinjoro Ooiŝi, detale klarigis al ni pri diversaj aparatoj kaj maŝinoj en flua Esperanto.

Ni nun volas paroli pri unu interesa aparato. En unu ĉambro ĉe la teretaĝo ni trovis aparaton, kiu similas al levilo kaj kies unu brako estas ligita al la tubo, vertikale staranta ĝis la plafono. La pinto de l' alia brako, kiu estas plenigita je viola inko, aŭtomate skribas kurbon sur blanka papero, kiu kovras la cilindron kaj rotacias daŭre kun tre malgranda rapideco. Ni ne komprenis, kiu igas la levilon skribi la kurbon. Sed kiam ni supreniris al la balkono, ni tute komprenis la kialon, ĉar tie ni trovis la tubon elstarantan el la planko de l' balkono, kies pinto sentas la fortecon kaj la direkton de l' vento kaj influas al la aparato tra la tubo. Rimarkinde estas, ke ne nur la tabeloj pendigataj sur la muroj, sed ankaŭ ĉiuj maŝinoj estas notitaj en Esperanto. Krome ni vifdis multajn specojn de aparatoj, kiuj servas por mezuri temperaturon, humidecon, econ de vento, atmosferan premon, pluvon, neĝon, k. t. p. Speciale en la observatorio oni studas aerologian fenomenon t. e. stato de altega ĉielo. Por tiu celo oni flugigas en tagoj de kvieta aero t. n. pilotbalonon kaj mezuras ĝiajn troviĝpunktojn de certaj tempintervaloj ĝis ĝia perfekta malapero. Per kalkulo oni povas sciiĝi la forton kaj la direkton de vento en difinitaj altecoj. En ventaj tagoj ni anstataŭe suprenigas kajton de grandioza grandecon, al kiu estas ligitaj memregistraj aparatoj por ecoj de vento, temperaturo kaj atmosfera premo, du lastaj el kiuj difinas altecon per certa formulo.

Por suprenigi la kajton oni uzas elektran motoron. La kajtodomo, kiu entenas la motoron kaj povas mem rotacii por servo al vento de kia ajn direkto staras meze de vasta kampo verdega.

En la kampo S-ino Ooiŝi serĉis por ni junajn platikodo-herbojn kiel donacaĵoj.

Jam alvenis tempo reveni. Adiaŭinte gesinjorojn ni rapidis aŭtomobile al Cuĉiura por kapti vagonaron, kiu transportis nin al Tokio je la 6-a vespere. Tiamaniere krepuskiĝis tiu memorinda tago.

Ĉe tiu ĉi okazo ni kore dankas Gesinjorojn Ooiŝi, kiuj afable nin akceptis.

優美な。konstru'aĵo 建物。ŝton'kolono 石柱。en'ir'ejo 入口。sur'skribo 標札。flor'bedo 花床。kontent'igi 滿足さす。stomako 胃。mal'-sata 空腹。laboratorio 實驗所。klar'igi 說明する。aparato 裝置。maŝino 機械。ter'etaĝo 一階。lev'ilo 挺子。vertikale 垂直に。plafono 天井。viola 菫色の。aŭtomate 自動的に。kurbo 曲線。rotacii 廻轉す。rapid'eco 速度。balkono 露臺。kial'o 理由。el'stari 突出す。planko 床(ユカ)。tabelo 表。pend'igi つるす。ne nur……sed ankaŭ ～ ……のみならず～も亦。humid'eco 濕度。eco 性質。atomosfera premo 氣壓。t.n.＝tiel nomata (所謂)の略字。pilot'-balono 測風氣球。temp'intervalo 一定時間をおいての時間の間隙。kajto 凧(氣象觀測用)。mem'registra 自ら記する。formulo 公式。motoro モートル(發動機)。platikodo 桔梗。krepusk'iĝi 黄昏れる。memor'inda 記念すべき。

aŭ pli ĝuste mi devis resti senmova. La kurteno de mia fantazio estas jam leviĝinta!

Miaj okuloj komence perdas sian vidkapablon, kvazaŭ per nebulo vualitaj. Iom poste hela punkto ekaperas en la malluma fundo kaj pli kaj pli grandiĝas, ĝis mi vidas en ĝi kelke da homaj figuroj moviĝantaj. La scenejo fariĝas ĉiam pli hela kaj klara, kvazaŭ oni trarigardus ĝin tra lorneto, adaptante ĝin al siaj okuloj. Gi ĉiam pli grandiĝas kaj alproksimiĝas, ĝis mi nun en ĝi klare vidas virinon sidantan kaj viron starantan ĉe ŝia dekstra flanko. Dum mi meditadas por rekoni ilin, ili rapide al mi alproksimiĝas, ĝis ili subite haltas dek aŭ dekkelkajn metrojn for de mi. Jen la viro estas tiu malgranda fiulo kun cindrokolora vizaĝo kaj enfalintaj okuloj, kiu kantis la kanton en la kelo. Li portas ponardon ĉirkaŭ ok col jn longan ĉe la zono kaj staras preta, metante sian maldekstran manon ĉe l' tenilo de la brile akrigita hakilo. Teruro trapenetris mian korpon. La virino kun la okuloj per mantuko ŝirmitaj serĉas per ambaŭ manoj la eŝafodon, kiu havas la grandecon de ordinara hakstablo kaj estas provizita per fera ringo ĉe sia antaŭa parto. Antaŭ la eŝafodo estas disĵetitaj pajleroj, eble por malhelpi la disfluadon de l' sango. Apogante sin kontraŭ la malantaŭa muro kelke da virinoj, eble ŝiaj ĉambristinoj, ploregas en torento da larmoj. Pastro, kiu trenas longan robon kun blanka subaĵo el lano, klinas sin por konduki ŝiajn monojn al la eŝafodo. Ŝi mem estas neĝblanke vestita; de tempo al tempo ondetas ŝia blonda hararo nubsimile pendanta sur la ŝultroj. Kiam mi nevole ekrigardis ŝian vizaĝon, ho! k'on mi vidis? Kvankam la okuloj ne estis videblaj, ŝiaj graciaj brovoj, subtila vizaĝo, delikata nuko, ĉiuj trajtoj estis tute samaj kiel tiuj de l' virino, kiun mi antaŭ nelonge renkontis. Mi volis tuj ĵeti min al ŝi, tamen pro fortega timo mi ne povis fari eĉ unu paŝon antaŭen. Dum la tempo ŝi fine atingis la eŝafodon kaj metis ambaŭ manojn sur ĝin. Ŝiaj lipoj tremetis same kiel antaŭe, kiam ŝi klarigis la blazonon de Dadley.

"Ĉu mia edzo Guilford jam estas en Dia Regno?" iom klinante la kapon ŝi demandas la pastron. Plenmano da haroj milde ondetas sur ŝiaj ŝultroj.

"Mi ne scias," respondas la pastro, "Ĉu vi tamen ankoraŭ ne ekvolas eniri la veran vojon?" iom poste li demandas ŝin.

"La vera vojo estas tiu, kiun mi kaj mia edzo kredas. Via vojo estas la erara, la falsa," ŝi akre respondas.

La pastro silentas kaj ŝi daŭrigas en la voĉo iom trankviligita. "Se li antaŭiras min, mi lin sekvos; se li postvenos min, mi lin gvidos. Per la justa vojo ni kune eniru la justan regnon de Dio." Si nun ĉesas paroli kaj ĵetas sian kapon sur la eŝafodon. La malgranda ekzekutisto kun cindrokolora vizaĝo kaj enfalintaj okuloj eklevas la hakilon per sia tuta forto. — Kelkaj gut j de sango surŝprucis mian pantalonon — Mi eksentis — Kaj

la tuta scenejo subite malaperis.

Mi ĉirkaŭrigardis. La virino kun la knabo jam ne estis tie. Kvazaŭ homo de vulpo ensorĉita, mi stultanima eliris la Turon. Kiam mi tamen sur la revenvojo preterpasis sub la Sonorila Turo, Guilford fulmorapide montretis sian vizaĝon el la altestaranta fenestro. "Se nur unu horon plifrue. . . . . Granda domaĝo ke tiuj tri alumetoj ne utiliĝis!" Mi eĉ aŭdis lin tiel parolanta. Ĉar mi plu ne povis konfidi mian konscion, mi rapidis eliri la Turon. Trapasinte la Turan Ponton mi rukrigardis kaj ĝusta nun ekatentis, ke ni hodiaŭ ankaŭ havas pluvan tagon, kiel estas kutimo en nordaj landoj. Tiu kvazaŭ tra kudriltruoj traverŝita nebulpluveto intermiksita per la polvo kaj fumo de l' urbego plenigis la tutan spacon inter ĉielo kaj tero, kaj jen en ĝia malluma fundo ekstaras kvazaŭ ombro de l' Hadeso la Turo de Londono.

Kiel somnambulo mi atingis mian pensionon kaj rakontis al la mastro pri mia vizito de l' Turo. "Ĉu vi ankaŭ ne vidis kvin korvojn?" Li min demandis. Mi estas vere surprizita de lia demando kaj dubis, ĉu li ne estus parenco de tiu virino mistera. "Ili estas dediĉitaj korvoj," li tamen simple klarigis. "De antikva tempo ili estas tie tenataj, kaj kiam eĉ unu el ili malaperas, ĝi estas tuj kompensata, tiel ke ili ĉiam restas kvin." Duono de mia fantazio estis tiamaniere detruita jam en la sama tago de mia vizito de l' Turo. Mi nun rakontis al li pri la epigrafoj. "Vi diras pri tiuj fiskribaĵoj. Dank' al tiaj stultaj agoj, la senmakula muro estas bedaŭrinde tute malpurigita. Manskribaĵoj de l' arestitoj? Ho ne, sufiĉe dubindaj! Multaj certe estas falsaĵoj." Li simple respondis kun indiferenta tono. Kiam mi fine kun miro rakontis al li, ke mi renkontis belan virinon, kiu tre facile povis legi la surskribaĵojn al mi tute ne legeblajn, li respondis al mi kun sarkasma voĉo. "Kiu vizitas la Turon, legas ja antaŭe ĝian gvidlibron. Neniel mirinde, ke oni havas tiagradan scion pri ĝi. Bela ŝi estis? Jes, ne malmulte da belulinoj vagadas ĉie en Londono. Vi bonvole gardu vin, sinjoro, por ke vi ne enfalu en la danĝeron!" Lia parolo tute neatendite fariĝis averto al mi kaj la alia duono de mia fantazio estis ankaŭ tiamaniere plene detruita. La mastro estas ja tipa londonano de l' 20-a centjaro.

Depost tiam mi decidis al mi mem, ke mi neniam refoje priparolu pri la Turo. Mi ankaŭ decidis al mi mem, ke mi neniam refoje vizitu la Turon de Londono.

—[FINO]—

説明を與へる事は甚だ困難なことであり誤りやすいものです。其れ故私は私の解釋があらゆる場合にあてはまるといふ保證はつけませんがまづ大凡あたりそうな（近似的な）解釋を與へるといふことにして説明したいと思ひます。私の考へでは“The British Esperantist”誌が示した樣に實際“jam”はそれ自身の中に狀態の變化（ŝanĝo de stato）の觀念を含んでゐるし“plu”は繼續（daŭrado）の觀念を含んでゐると思ひます。又“jam ne”は以前に存在しなかつたもので單に意企され又希望されたものにも關係することもできるが——一方“ne plu”の方は唯既に以前に存在したもののみに關聯するのみです。例へば若したとへ私が嘗つて一度も貴君を訪問したことがなかつたとしても唯訪問しようと意企したのならば（そしてもし私がその意企を變更した時には）“mi jam ne vizitos vin”と云ふ事ができます、併し私が既に以前に貴君を訪問したことがあるといふ場合でない限り“mi vin ne vizitos plu”とは云ふ事ができない。尙“ne jam”（これは“jam ne”とは全く別の意味をもつてゐるが）といふ云ひ方は誤解を惹しやすいから私は之を使用することをお勸め致しません。そして私はその代りに“ankoraŭ ne”を使用することをお勸め致します。——尙“pli”は“plu”の代りに屢々代用されますが常に代用され得るとは限りません。“pli”=pli multe であり“plu”=daŭre, pli malproksimen であります、卽ち“pli”は量卽ち多量を意味し“plu”の方は（場所又は時に關して）繼續を意味してゐます。それで抽象的の場合には其等の意味は殆んど同一になりますから、屢々兩者を互に代用し合ふ事ができます。併しながら我々が數量又は繼續（或は遠ざかること）に就いてまつすぐに話す場合には兩語を混用してはなりません。

(La Revuo, 1907, Oktobro.)

前置詞的副詞

もし意義上必要な際には我々は副詞を前置詞の意味に用ひて差支へありません、而してその際にどんな形にすべきかについては私は或る唯一つの規則をきめてそれで自分達を縛るといふ樣なことをお勸めしたくありません。卽ち私はその度毎に文章上の特別の要求に應じてそれにあてはまる樣にすることをお勸めしたいのです。例へばもし其副詞が（目的格をとる）他動詞から誘導されたものならば其前置詞たる副詞（adverbo-prepozicio）は其の同じ性質を保存してゐて目的格と共に用ひ（例へば“koncerne tion”=kio koncernas tion, “rilate tion”=kio rilatas tion.）、若し其副詞が名詞と唯或前置詞によつてのみ結びつくことのできる或る語の代用であるならば其副詞はその後へ其前置詞をとることにし（例へば“kaŭze de tio”=pro la kaŭzo de tio, “responde al via demando”=kiel respondo al via demando.）、もし其副詞が誘導語でなく本來のものでそれ自身前置詞の意味をもつものならば他の總べての前置詞の如く名詞と直接に卽ち前置詞を伴はず又は目的格とせずに結びつける（例へば“spite mia malamiko”）。併しすべて疑はしい場合には前置詞的副詞の後へ“je”といふ前置詞又は目的格を用ひるならば誤をさける事ができます、それはつまり御存じの樣に我々の文法によれば二つの語の間の前置詞的關係が十分明白でない時には總べて前置詞“je”を用ひる事ができ又“je”の代りに常に目的格を用ひる事もできる事になつてゐるからです。勿論貴君の此の總べての三つの質問について私はこゝに唯私一個人の意見を述べたのであつて決して或種の强制的の決定を與へたのでない事を御注意願ひたいと思ひます。もし貴君が總べての前置詞と不定法を併用する事と“laktumo”に對する別の語を使用する事及び總べての前置詞的副詞とに對する一定の法則を適用する事を許すべき事が必要だと御考へならばそれに對して貴君が言語委員會の投票による公式の決定を獲らるる樣努力するがよいでしよう。

(La Revuo, 1908, Majo.)

“ĉu”

“ĉu”なる語を出來るだけ疑問（demanda）の意味にのみ使用すべしと云ふ貴君の御意見は正しいと考へます。我々は又一層よい語がない場合にはこの語を不確か（necerteco）の意味或は疑ひ（duba）の意味或は其れに類した意味に使用することができます（貴君のしめされた“ĉu pro timo, ĉu pro fiereco, li nenion respondis”といふ文例に於ける如くに）、併し私は之を不必要なのに“jen”や“aŭ”等の代

りに使用することは決してお勸めしたくないと思ひます。"Ŝi kutimas havi ĉe sia zono ĉu rozon, ĉu diamanton" といふのや "diru tion ĉu al la kapitano, ĉu al la leŭtenanto" 等いふのはよろしくないと云ふ貴君のお考へは尤ものことと思ひます、私は前者には "jen" を後者には "aŭ" を使用したいと思ひます。 (La Revuo, 1907, Junio.)

絶對奪格

絶對奪格 (ablativo absoluta) は或る種の少數の言語に於てのみ用ひられる特殊の形式であります、其れはエスペラントに於ては存在しないのです。勿論其れは直接にはちつとも禁じられてはゐないのですが併しそれを使用する事は我々の言語の精神に反するでありませう。エスペラントに於ては副詞的分詞 (adverba participo) は常に主文 (ĉefa propozicio) の主語に關係するのであります。從つて我々は "farinte (kiam la *leono* faris) la dividon, la *leono* diris" と云ふ事ができますが "la divido estante farita (=kiam la *divido* estis farita), la *leono* diris" と云ふことは出來ません。(大多數の國民にとつて或る不自然の感じをあたへる所の) ラテン語或はフランス語の絶對奪格を採用する必要は毛頭ないのです、何となれば我々はそれを常に一層自然な形で云ひかへる事ができるからです。貴君の示された ("la reĝo kunvokis siajn konsilistojn, por ke, *ĉiu el ili eldirante sian opinion*, li povu fari decidon") なる文に於て我々は斜體文字で表した部分を "kiam ĉiu el ili eldiros sian opinion" 或は一層簡單な "aŭdinte la opiniojn de ĉiuj" を以て全く巧みに置き換へることができます。

(La Revuo, 1907, Junio.)

接續詞

"kaj"

我々の言語の最初の教科書の出現後かれこれ五六箇月程した時一人の人が手紙を我々に寄こして我々の言語は甚だ結構であり立派であるが唯一つ "kaj" といふ語が大變氣に入らないから我々が "kaj" といふ語を放棄すべしとの條件をいれるならば我々の言語を習ひ憶えようといふ約束を書き送つてこられました！しかもこの方は決して諧謔家ではないので全く眞面目に書かれたのである！ "kaj" といふ語がよいか惡いかは兎に角――この一例は（其のやり方に於て唯一のものではないが）或る人々の中には我々の事業の性質を全く了解せられずして純然たる個人的の見地から之を觀てゐると云ふことを示すものであります。此の方はこゝに提出した無意味な小變更が實際この事業そのものにとつて必要か否かを分析してみる代りに "kaj" といふ語が變更されない限り自ら其言語を習得しないといふことを云はれたのです。假りに "kaj" なる語それ自身は容易に變更できるものであると假定してみても――若しすべての學習者が自分の個人的の好惡によつて總べてのものを變更せよと望むならば世界語は存在し得る時が來るでありませうか？若し我々が世界語を持ちたいとならば何より先に我々は自分の個人的の趣味を最も最後の案とする習慣を造らねばならぬ。扨 "kaj" の變更が實際重大な且つ個人的でなく共通的な目的をもつものと假定しよう、そして此語を如何になすべきかを見ませう。一體 "kaj" なる語は何が故に非難されるべきでせうか？發音が醜惡なのか？長すぎるのか？精密でないのか？他の語との混亂を惹起するのか？我々は此等の質問に對して絶對的の『否』を以て答へるより以外の答をする人があることを大變疑しく思ふ次第です。然らば何か？此提案者は『出鱈目に考案した kaj』の代りに誰も知つてゐる "et" 或は "e" を採用すべしと云はれるのであります。尙一層奧深く入りこまないでも既に此の些少事は若し我々が猶未だ "kaj" と "e, et" とのどちらかを全く自由に撰擇し得る場合に於ては變更の動機として役立つでありませうがかゝる些細の動機のために此言語に對して破壞 (rompo) をなすことは全く價値のないことだといふことを答へることができませう。併し我々が一層奧深く探つてみますならば此の言語が猶未だ作られてゐない當時に於てさへも "et, e" が "kaj" よりも一層よいと云ふことは大きな問題であらうと思ひます。"kaj" といふ語は單に不便でないのみでなく亦全く出鱈目に案出したものでもない（この語はギリシヤ語でラテン語の "et" にあたるものです）

Wüster の Enciklopedia Vortaro 豫約者諸氏へ

右の辭書取次人東宮豐達死去致しましたに就きましては私共兩人が責任を以て後を引繼ぎまして皆樣には些の御迷惑もおかけしません樣いたしますから御懸念なき樣お願ひ致します。猶右の辭書は編者の都合により續卷の發行が一時中絶致してをりますが何れ出版の運びになりますことさ思ひます。

昭和2年8月15日

神奈川縣小田原町十字四丁目の887
妻　東宮貴子
長野縣輕井澤郵便局私書函第6號
友人　古澤末治郎



無代進呈

★エスペラント宣傳の『栞』——（講習會頒布用）百枚以下無料（但送料卅枚毎に四錢）百枚以上百枚毎に實費送料共六十五錢にて

★エスペラント宣傳の「チラシビラ」（街上展覽會等で配布すべきもの）三百枚以下無料（但送料百枚毎に二錢）三百枚以上は百枚毎に實費送料共十錢にて

直接當會宛申込に限る

日本風景風俗エハガキ（四枚一組三色刷）（エス文說明付）（價廿錢送料二錢）

綠星章（圓形七寶美麗）（送料共三十錢）（安全ピン止めとボタン孔へ挿入の二種あり）

綠星旗（紙製）（十枚送料共十五錢）

半紙大原紙兩面綠色刷、左角四分の一は白地に綠の星、殘四分三は綠の地にエスペラントと白く抜きたるもの。展覽會その他の際タコアシに使用して好適。十枚以下賣りません。但し見本希望の方には郵券五錢送れば二枚送る。

エスペラントの歌と其の譯

（四六倍大八頁 一部三錢送料二錢 十部送料共二十錢）

エスペラントの歌 La Espero, Sankta Lucio, Vi bordoj de la bela Dun', Ho Normandi', Printempo, Adiaŭ の六篇に和譯（高尾亮雄氏譯）を附し註を付す。

エスペラント圖書一覽

エスペラント發音研究（定價五十錢 送料二錢）（發音上の疑問はすべて本書にて氷解）

エスペラントやさしい讀み物（特價十錢 送料二錢）（エス笑話二十二篇に懇切な譯と註を附す）

新撰エス和辭典（定價七十五錢 送料二錢）（語數一萬五千餘語、譯語正確、索出至便、附錄文法一覽）

エスペラント捷徑（定價一圓 送料六錢）（四六版百六十頁クロース美本エス語獨習書中の白眉）

エスペラント講習用書（定價五十錢 送料四錢）（一萬部賣切を機として表紙を堅紙にし背をクロースに堅牢にせり）

エスペラント初等講座（定價二十錢 送料二錢）（外國語の素養の全然ない人のためにエス文法をとく）

★當會出版書籍はすべて直接當會宛前金にて注文に限り十部以上二割引（送料も當方負擔）★

東京市牛込區新小川町3の14（振替東京11325番）

財團法人 日本エスペラント學會

我國におけるエスペラント普及・研究・實用の中心機關

財團法人 日本エスペラント學會

【東京市牛込區新小川町三の十四】【振替口座東京11325番】

◆すべての運動は大衆の協力に俟たねばならぬ。今やエスペラント普及運動は最も多衆の協力を必要とする時だ。各地同志の大同團結が必要だ。個々人の叫びは個々人の叫びにすぎない。大衆の叫びは輿論の喚起だ。組織だつた協力こそ眞の力だ。
◆エスペラントを愛するものは誰しも御入會下さい。(會員は法規上維持員とよぶ)

目的 エスペラントの普及．研究．實用

事業
- (a) エスペラントに關する各種の研究調査及其發表
- (b) 雜誌及圖書の刊行等
- (c) 講演會、講習會の開催及後援
- (d) 其他本會の目的を達成するに必要と認むる事業

會費
- (a) 普通會員 年額2圓40錢　(b) 贊助會員 年額5圓
- (c) 特別會員 年額10圓以上　(d) 終身會員 一時金100圓

入會手續 住所、職業、姓名(振カナ付)を明記し會費一年分を支拂へばよい。(振替送金最も安全)

會員の特典
1. 毎月研究雜誌"La Revuo Orienta"の配布をうく
2. 出版圖書の割引をうくることあり
3. 語學上の質疑其他一般の問合の返事をうく
4. 宣傳の「栞」その他宣傳材料を無料でうくることを得

詳しいことは直接御問合せ下さい

役員名簿 (五十音順)

理事長	理學博士	中村精男
理事		上野孝男
同	元鐵道省運輸局長	種田虎雄
同	東京女子大學教授	河崎なつ
同	中央大學教授	川原次吉郎
同		何盛三
同	帝大教授文學博士	黑板勝美
同	政治教育會長 專修大學教授	小林鐵太郎
同	帝大名譽教授 文學博士	高楠順次郎
理事	帝大教授醫學博士	西成甫
同		美野田琢磨
同	慶大教授醫學博士	望月周三郎
同	東京朝日新聞顧問	柳田國男
同		大井學
同		三石五六
監事	高層氣象臺長	大石和三郎
同	神奈川縣立農業學校長	清水勝雄
同		木崎宏
顧問	帝大教授 法學博士 男爵	穗積重遠
同	子爵	三島章道

本誌購讀料(郵稅共)

一部	24錢	學會々員には無代頒布す
半年分	1圓40錢	
一年分	2圓60錢	

本會振替口座番號
(基本金專用)東京三〇八九番
(一般會計用)長野三二八三番
東京一一三二五番

廣告料

	1回	3回	6回	12回
全頁	25圓	72圓	140圓	250圓
半頁	〃13	〃37	〃74	〃130
四半頁	〃7	〃19	〃38	〃70

◆金錢に關係なき廣告四割引
◆表紙第三頁は二割增の事
◆表紙第二頁第四頁はお斷り
◆特別會員の廣告は二割引

昭和二年七月二十五日印刷
昭和二年八月一日發行

編輯兼發行人　大井學　東京市牛込區新小川町三ノ十四
印刷人　高見澤保芳　東京市神田區西小川町二ノ五
印刷所　株式會社二四印刷所　東京市神田區西小川町二ノ五
發行所　財團法人日本エスペラント學會　東京市牛込區新小川町三ノ十四